

第2回 石川県書写書道教育研究大会

[大会テーマ]

『基礎・基本をふまえて

豊かな心を育てる書写書道教育』

－楽しく学べる授業を目指して－

日 時 平成3年11月18日(月) 9:00~16:00

会 場 野々市町立野々市小学校

石川県立養護学校

野々市町文化会館(フォルテ)

主 催 石川県書写書道教育連盟

後 援 石川県教育委員会

野々市教育委員会

石川県私立幼稚園協会

目 次

1. 挨拶・祝辞

石川県書写書道教育連盟会長 第2回石川県書写書道教育研究大会長	藤 則 雄	1
石川県教育委員会委員長	肥 田 保 久	2
野々市町教育委員会教育長	東 谷 弘	3

2. 第2回石川県書写書道教育研究大会要項 4

3. 公開授業学習指導案

野々市小学校 教諭	西川 真理	6
野々市小学校 教諭	細川 真弓	8

4. 研究誌上発表

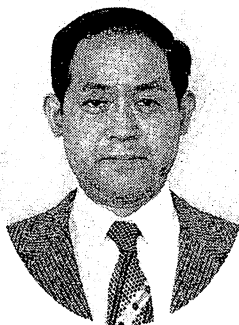
久直学園（明成幼稚園） 園長	嘉門 久直	11
加賀市立山代小学校 教諭	陰元外美栄	16
金沢市立伏見台小学校 教諭	石野 昌子	19
金沢市立鳴和中学校 教諭	八田 和幸	29
石川県立明和養護学校 教諭	鏑木 由美	34
石川県立金沢錦丘高等学校 講師	本多美千子	38
小松市立女子高等学校 教諭	東野 洋子	42
石川県立大聖寺高等学校 講師	松井 瑞代	55

5. 第2回石川県書写書道教育研究大会経過報告 61

6. 第2回石川県書写書道教育研究大会役員一覧 66

7. 石川県書写書道教育連盟規約 67

ご挨拶



石川県書写書道教育連盟会長
第2回石川県書写書道教育研究大会長

藤 則 雄

菊花香り、秋も深まりゆく本日、石川県下の各地から本連盟の会員各位をはじめとして、関係各位のご参加をえて、ここに、第2回石川県書写書道教育研究大会が開催されることになりましたことは、誠に喜ばしいことであり、参加された皆様のたいなるご研鑽を、心から期待いたしております。

顧みますると、石川県書写書道教育連盟が発歩したのは、一昨年のものであり、昭和から平成へという改元の年であり、そして更に、21世紀を目指しての新学習指導要領の公示の年でもあり、新連盟の発歩にふさわしい、極めて意義深い年でありました。また、本連盟の組織も、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特殊教育諸学校、そして、大学をも含め、一貫した書写書道教育と書道文化の発展・充実に努めることに、本連盟の目的をすえました。

本連盟では、この目的達成のために、研究大会の開催を、本会の事業の第一に掲げ、昨年、その第1回を開催し、本年は、その第2回目を計画し、本日その開催の運びとなりました。

第2回大会におきましても、書写書道教育においてその重要課題とされている「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる」ことを、大会の主要テーマにすえ、「豊かな心を育てる」ことを、書写教育を通して、如何に達成すべきかを研究課題としております。

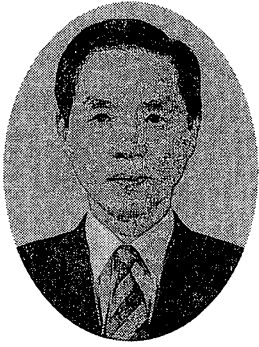
「豊かな心を育てる」ことは、云うまでもなく、書写書道教育だけのテーマでなく、それは、教育界全体に課せられた重要課題の一つであります。が、「感性」を育てる芸術の一分野でもある書写書道教育に課せられた期待には、更に大なるものが在ると確信しております。

ご参加されました各位の英知と、これまでのご成果を十分に発揮され、更なる将来へのご発展を心から祈念いたします。

最後に、本研究大会の開催に当たり、いろいろとご援助・ご協力を賜りました教育委員会・教育事務所・各種学校の方々、そして、本日に至るまで長い間、ご準備された関係各位に、そして、本日の公開授業のために日夜研究され、準備されてこられた授業者に、心からの敬意と感謝の意を表する次第であります。

石川県書写書道教育連盟が、今後ますます発展できますように、そして、会員各位のご健勝とご研究・教育のご進展とを祈念して、第2回大会開催のご挨拶といたします。

(金沢大学教育学部長)



祝 辞

石川県書写書道教育連盟顧問

肥 田 保 久

石川県書写書道教育連盟が、発足から三年目を迎え、県内の書道教育振興の上において大きな意義と成果を収められていることは、私ども教育関係者としましては大変喜ばしい限りであります。

我々の伝統文化である、文字そのものの美しさに対する意識・関心は、世の中のスピード化、価値観の多様化、機器による表記方法の変化等によって、薄れつつあることが昨今指摘されてきております。

しかし、そうした中で、祖先から受け継がれてきた、日本独特の言葉、そして、磨かれてきた文章表現や美しい文字表現を次代に後継していくことは、我々の責務でもあります。

このたびの教育課程の改訂においても、国語教育の中で、小学校・中学校・高等学校の書写・書道教育が、一貫して重視されたことは、我が国の文化と伝統の尊重として見直されてきた結果ともいえます。

小・中学校では、国語科の言語事項の分野に置かれ、文字指導の重要性の認識の上において、芸術性よりも基礎・基本である文字指導を重視し、また、毛筆が硬筆の基礎であることを打ち出して、日本語の文字の成り立ちを大切にしております。

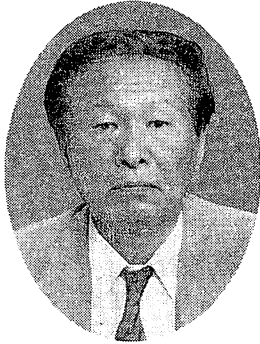
高等学校では、それらをふまえて、文字の美、芸術性が掲げられております。

文字を書くということは、これからの生涯にわたる学習に深くかかわる大切なものであり、文字を大切に一字をもゆるがせにしない指導は、文章を大切にすることに繋がるとともに、文字を通しての豊かな心の育成でもあるといえましょう。

こうした観点から、まず教える教師自身が、正しい文字、美しい文字に対して敏感であるとともに、一層熱意をもって指導にあたるのが大切であります。

書写・書道教育という面では、国語科の中の漢字指導との連携、小中高一貫した系統的な指導法等、いろいろな課題も出てくることですが、県内の幼・小・中・高・大学が一同に会して研鑽するこうした会が中心となり、今後も一層の成果を収められますよう切に祈念いたしますとともに、今日までの関係者の御苦勞に深く敬意を表し、祝辞といたします。

(石川県教育委員会教育長)



祝 辞

野々市町教育委員会教育長

東 谷 弘

石川県書写書道教育連盟の第2回研究大会が、じよんがらおどりで名高い野々市町を中心に開催されますことを心からおよこび申し上げます。

今回の研究大会は「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」をテーマに挙げ、まさに時代の要請にこたえるために、幼稚園から、大学までを網羅してのものであり、昨年度の第1回大会を上まわる成果があるものと期待いたしております。

ご承知のように、新学習指導要領において、小学校及び中学校の書写は、文字指導の一環と位置付けられ、一層の充実・強化が図られております。本研究大会のサブテーマに、「楽しく学べる授業を目指して」とありますのも、その点を意識されてのことであろうと拝察いたしております。

近年、OA機器があらゆる場に導入され、文字を書くことの意義が、失われつつあるように思われます。文字の持つ意味や美しさを、楽しい授業を通して指導していくことは、伝統文化を育んでいくことにつながっていくと考えられます。そうした意味からも、書写書道教育を中心にした文字指導の重要性が問われてきていると思います。

本日、石川県下各地から多数参加されました皆様が、本研究大会の主旨を十分に理解されて、各学校において、書写書道教育の担い手としての役割を果たされるよう心から期待してやみません。

最後に、本研究大会開催のために、今日まで、ご準備にあたられた関係の皆さま、また本日の研究授業のために日夜研究されてこられた各先生方に心からの敬意を表すものであります。

石川県書写書道教育連盟が今後ますます発展され研究を積み重ねられ、時代の要請にこたえた実践を行っていかれることを強く祈念し、お祝いのことばといたします。

第2回石川県書写書道教育研究大会

1. 研究大会テーマ

「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
楽しく学べる授業を目指して

2. 期日 平成3年 11月18日 (月)

3. 会場 野々市町文化会館・フォルテ (主会場)

野々市町立野々市小学校

石川県立養護学校

4. 主催 石川県書写書道教育連盟

5. 後援 石川県教育委員会・野々市町教育委員会・石川県私立幼稚園協会

6. 記念講演 (15:00~16:00)

演題 「児童生徒の心をひきつける具体的な指導法」

講師 續木湖山先生 (帝京大学教授)

7. 日程

10:00:35 11:20:40 12:20:50 13:05 13:50 14:10 15:00 16:00

受付	公開	移動	研究	昼食	受付	学校	移動	全体会	記念
	授		協議会1	移動		開		研究協議会2	講演
野々市小学校			野々市町文化会館			県立養護学校		野々市町文化会館	

8. 公開授業 小学校 (10:35~11:20) 養護学校 (13:05~13:50)

校種	年	区分	単元名	指導者
小学校	1	硬筆	「字のかたち」	西川真理 (野々市立野々市小学校教諭)
小学校	6	毛筆	「文字の中心」	細川真弓 (野々市立野々市小学校教諭)
養護学校	学校公開			南進 (石川県立養護学校教頭)
				平杉吉次 (石川県立養護学校特設講師) 助

9. 研究協議会 (全体協議会)

	助言者	司会者	記録者
研究協議会1 11:40~12:20	県教委七尾地方教育事務所指導主事 山田寿一 津幡町立中央小学校長 森川登夫	金沢市立湯涌小学校教頭 吉田長憲	野々市町立香原小学校教諭 井南智子 珠羽市立宝立小学校教諭 宮崎聡美
研究協議会2 14:20~14:50	金沢市教委学校教育課主任兼学務課長 村井由恵	石川県立明和養護学校教頭 村本恒夫	野々市町立野々市小学校教諭 須藤佐和子 金沢市立西南部中学校教諭 老田さゆり

10. 全体会 (14:10~15:00)

- ・会長挨拶 ・祝辞 (石川県教育委員会・野々市町教育委員会)
- ・研究協議会2 ・研究協議会報告 (小学校)
- ・講評

(公開授業)

小学校 1 年国語科書写 (硬筆) 学習指導案

児童 野々市町立野々市小学校 1年3組
男子 17名, 女子 16名, 計 33名
指導者 教 諭 西 川 真 理

1 単元名 文字のかたち (外形)

2 目標

- ① 姿勢や鉛筆の持ち方を正しくして文字を書くことができるようにさせる。
- ② おおまかな外形で表される文字の特徴をとらえて、筆順に従って丁寧に書くことができるようにさせる。
- ③ 点画の長短や方向などに注意して、文字のかたちを整えて書くことができるようにさせる。
- ④ 基本的な点画の書き方、特に点画の終筆である「とめ、はね、はらい」の書き方が正しくできるようにさせる。

3 指導にあたって

1年生の児童は、文字を書くことへの興味は強いが、字形の違い (外形) を正しく理解したり、文字の細かな部分 (点画の長短・方向) まで注意を払ったりすることがあまりできない。

新学習指導要領の第1学年の目標と内容に示されている「書写に関する事項」をふまえて、1学期は平仮名の指導をしてきた。児童は「平仮名はもう書ける」という彼らなりの自信をつけたようである。2学期に入ってから片仮名や漢字の学習にも、児童は意欲的に取り組んでいる。

しかし、平仮名に比べて指導にかける時間が少ない上に、児童は毎日次々と新しい文字を学習していくので、既習の文字をおぎなりに書く傾向にあるのが気にかかる。

そこで、基礎的な指導事項である「姿勢や用具の持ち方」を正しくさせ、特に文字全体の形に注目して丁寧に書く態度を育て、さらには、これまで単に「知っている」「書ける」という段階から、正しく整った文字が書けたという喜びを味わわせたい。

そして、児童が少しでも楽しく学習できるように指導の方法を工夫してみたい。

4 指導計画 (3 時間)

- (第1時) おおまかな外形を意識させ、筆順に従って丁寧に書かせる。 (本時)
(第2時) 点画の長短や方向などに気をつけて、文字を正しく整えて書かせる。
(第3時) 点画の終筆の「とめ、はね、はらい」に気をつけて、文字を正しく書かせる。

5 本時の学習指導

(1) 教材 文字のかたち（外形）（光村図書 しょうがくかきかた1ねん）

(2) ねらい ◎おおまかな外形で表される文字の特徴を理解させる。

◎外形に注意して、筆順に従って丁寧に書かせる。

(3) 準備 ▽のシート、拡大コピー、練習用紙

(4) 指導過程

指導事項	時間	学習活動	指導上の留意点
1.学習のめあてを知る	5分	目 目 目 → □ ・たて長の外形に気づく	・児童のノートの文字の拡大コピーを掲示する
《 文字のかたちをよく見て書こう 》			
2.教材の文字を知る	8分	・新出漢字を学習する「下」 ・漢字の成り立ちを知る ・空書きをする ・文字のおおまかな形をとらえる	下 下 下 (あるところより下にある意) ・漢字に関心を持たせる ・筆順を確認させる ・拡大手本を書く
3.試書をする	8分	・プリントに書く ・班から一人ずつ前へ出て、チョークで書く	・姿勢を注意する(机間巡視) ・黒板の字と手本の字を比べさせる
4.学習の基準を知る	3分	・「下」… 逆三角形の外形をとらえて書く と形が整う	・▽のシートをかぶせる
5.練習をする	6分	・外形を意識して、練習用紙①に書く	・鉛筆の持ち方を注意する ・丁寧に書かせる
6.批正をする	3分	・隣同士で、もう少しの所を指摘し合う	・机間巡視する
7.清書をする	4分	・批正したことに気をつけて清書する ・試書と比べてみる	・正しい姿勢で書かせる
8.応用練習をする	7分	・既習の文字を、その外形に注意して練習用紙②に書く 日 → □, 山 → △, 四 → □	・児童のノートの字の拡大コピーと、比べて自己評価させる
文字の外形をとらえて書くと、かたちの整った字が書ける			
9.学習のまとめをする	1分	・ふだんノートに書くときも文字の外形に気をつける	・次時へ意欲を持たせる

(5) 評価 ◎文字の外形をとらえて、丁寧に書くことができたか。

(公開授業)

小学校6年国語科書写(毛筆)学習指導案

児童 野々市町立野々市小学校 6年2組
男子 20名, 女子 19名, 計 39名
指導者 教 諭 細 川 真 弓

1 単元名 文字の配列(中心)

2 目標

- ① 漢字のへんとつくりの組み合わせ方を理解して、字形を整えて書くことができるようにさせる。
- ② 文字の中心をそろえて、行が曲がらないように書くことができるようにさせる。

3 指導にあたって

高学年になると、学習内容が豊富になり、文字量が増加し、書く速度が要求されてくる。これらのことから、文字を整えて書こうとする意識が失われ、雑に書く傾向がますます強くなってくる。また、毛筆で文字を書くことに抵抗を持っている児童も少なくない。

そこで年度当初から、まず書く意欲を高める指導を心がけ、指導方法について工夫を重ねてきたのである。

第6学年は、いわば小学校における書写指導の完成を図る段階である。5年生までに学習してきた字形の整え方や文字の配列などの書写技能を、一層確かなものにしていくよう指導することが大切である。

今回、初めて半紙四字書きの題材を取り上げてみた。文字の組立方を理解させながら、文字の形を整えて、字配りよく書かせたい。そのためには、特に文字の中心のとり方に注目させ、へんとつくりの組み合わせ方に重点を置いて指導したい。

そして、児童が学習の成果を知り、上達した喜びを感じることができるよう、平易に、かつ楽しく授業を展開していきたい。

4 指導計画(3時間)

(第1時) 文字の中心のとり方や、へんとつくりの形の変化に注意して書かせる。

(本時)

(第2時) 文字の中心をそろえて、行が曲がらないように書かせる。

(第3時) 四文字の字配りや、仮名と漢字の調和を考えて書かせる。

5 本時の学習指導

- (1) 教材 文字の配列(中心) (光村図書 小学書き方6年)
- (2) ねらい ◎文字の中心のとり方を理解させる。
◎「読」「秋」のへんとつくりの組み合わせ方を理解して、字形を整えて書くことができるようにさせる。
- (3) 準備 拡大手本、中心線赤テープ、点画ピース、練習用紙、参考作品
- (4) 指導過程

指導事項	時間	学習活動	指導上の留意点
1.教材の文字を確認する	4分	・「読書の秋」の[読]と[秋]を硬筆で書く	・練習する字の筆順や字形を確認させる
2.試書をする	7分	・半紙に試書する ・手本通りに書けなかった所を発表する	・半紙に二字大きく書かせ、とっておくように指示する
3.学習の目標と基準を知る	5分	・点画ピースを使って整った文字を作り上げる ・文字の中心がどこかを考える ・へんとつくりの組み合わせ方を知る	・参考作品を掲示し、よい例と悪い例を比較させる ・文字の中心をとらえさせ、へんとつくりの幅の違いに着眼させる
4.一次練習をする	6分	・練習用紙①に書く ・半紙に練習する(1枚)	(机間巡視) ・半紙を縦に半分に折って、二字大きく書かせる
5.批正をする	3分	・基準に照らして、自己批正する	・拡大手本を参考にして、文字の中心をとって書けている部分に○をつけさせる
6.二次練習をする	10分	・練習用紙②に書く(籠書き、渡り書き) ・半紙に練習する(2枚)	・籠書きは一斉に書かせる ・半紙四字書きの大きさを書かせる(机間巡視)
7.自己評価をする	3分	・試書と比べて、自己評価をする	・特によくできた所を赤ペンで◎をつけさせる
8.応用練習とまとめをする	7分	・フェルトペンを使って、硬筆用紙に書く	・進歩の著しい作品を掲示し次時への意欲を持たせる

- (5) 評価 ◎文字の中心をとらえ、字形を整えて書くことができたか。

Memo:

A large, empty rectangular box with a thin black border, occupying most of the page below the 'Memo:' label. It is intended for the user to write their memo content.

書道への興味と関心

～園生活での書道の意義～

久直学園（明成幼稚園） 園長 嘉門 久直

1. はじめに

「動」の生活の多い幼児期に、「静」の時間を作り出し、そうすることにより、「静」の大切さを知り、さらには「動」への活性化へと進めていけると信じ、保育の中へ書道を入れてきてから、十年になりました。とはいえ、年々幼児も変わってきます。マンネリにならないよう、毎回新鮮な気持ちで、講師の先生と教師で足並みを揃えて指導にあたっています。興味や関心が持てる指導を考え、留意していったことを列記し、園生活の中で、幼児にとっての書道の意義を考えていきたいと思えます。

2. 遊びを取り入れて

(1) 道具の準備

各々の書道セットの中にしまい込むとシワになったり、まだしっかりと拭き取れずについかびてしまったりする下敷きや筆は、書道セットとは別に箱に片付けてある。年長児（5才児）は、自分で書道セット、下敷き（フェルト布）、筆と順序よく、机の所へ持って行き、「準備よし！」といった顔で、教師や講師の指示を待っている。硯も出され、書道セットも机の横に掛けて待っている姿は、「動」を沈め、「静」を呼んでいる素晴らしいものが感じられる。目はとても輝いているのです。自分の机の上のそれぞれの道具は、幼児にとって遊びそのものなのです。筆の置き方を変えてみたり、下敷きのシワを伸ばすことも、楽しい動作で表してきます。隣の子と下敷きのかたがり具合を見比べたり、筆の先をそっと整えてみて、手に墨がついていそうな気がして、あわてて手を引っ込めたり表情豊かです。

(2) 墨をする

揃った道具の前にきちんと座った幼児を見回してから、硯に水滴を注いで回ります。毎回注がれる水滴ではあるけれど、決して同じ形にはならない。それが嬉しいのです。ちよつと縦に長い日、横に広がる日、でこぼこの形の日、右の方から見たり左の方から見たり、向こう側へ体を乗り出してみたり、「こぼさないでね！」の教師の注意に「へへへ」バツの悪そうな顔をちよつと見せ、そのくせ悪いとは思ってなく、フーンと丸い水滴に満足しているのです。

皆で声を揃えて、1, 2, 3……と数えながら手をゆっくり動かし、墨をすりはじめ。「音を立てないで、円を描くようにして手を動かしましょうね」と声を掛け、皆を見て回りながらの指導。幼児はやはり指先の力がないため、つい手全体で握り込んでしまいそうになるので、「墨の上の方をしっかりと、つまむように持ちましょうね」と持ち方の指導も折りにふれて話していきます。「左手はどこに置くのかな？」と硯が動かないように押さえる手を忘れていた子に言うと、あわてて硯に手が行く。頭を優しくなでてあげると、「もう忘れない」と目で答えてくれる。数え出した数が、

100ぐらいになってくると、墨の色がだんだん出てきて、墨のにおいも部屋じゅうになってくる。姿勢も少し悪くなってくるので、正しい姿勢だといひ色の墨になると励ましていく。墨の香りは、人の心を落ち着かせるものであることを話します。幼児にもその心を感じ取ってもらいたいと願いながら。今すぐには解るものではないが、小さな心と、言葉の積み重ねを大切に話していく。心にぶつかっていく講師の姿勢は、幼児にも解る時がくるのではないかと思う。

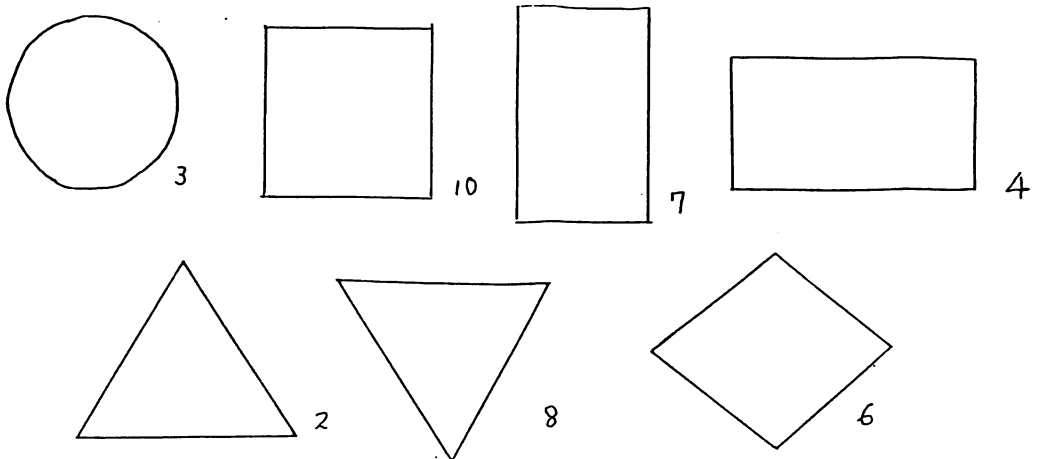
(3) 書き順を学ぶ

黒板に、今日の課題を色チョークで書く。一線ごとに色を変えて書く。幼児に「1番目は何色ですか?」と問いかける。書き順も、色や形で覚えていく。字も全体からの形のイメージで覚える幼児期には、色別の書き順はとても良い指導法だと思っています。「赤色の次は緑で、次は青ね!」とリズムをつけて、強弱もつけ、筆の力の入れ具合に合わせて、黒板の字をなぞってみる。幼児も空に書いた筆の運びも、自然と講師に似た動きをするようになってくる。幼児の素直さが表われる。体全体で未熟ながらも、一生懸命にやろうとする中に、「止め」「はねる」「はらう」と指導していったものが、少しずつ身に付いていく。実に頼もしい。

(4) 形を考える

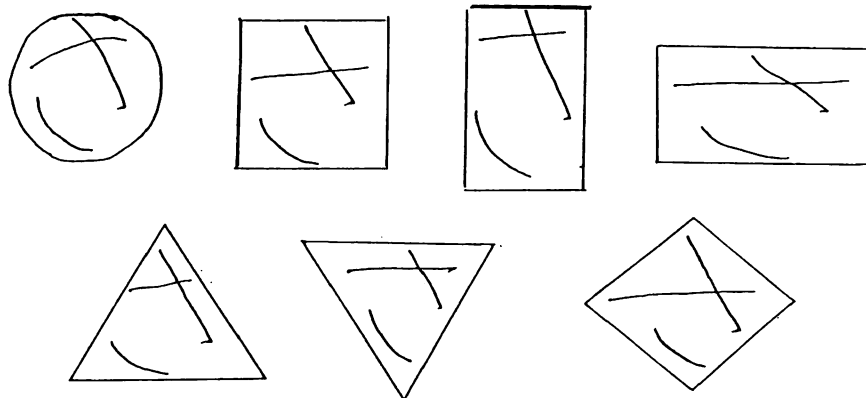
「さ」という字を取り上げた時、幼児にどんな形にしたらよいか問いかける。考えを進めていく過程で、黒板に、丸、四角、長四角、横長四角、三角形、逆三角形、ひし形の形を描く。幼児は自分なりに色々な「さ」を想像してみる。「あれ」「こっちの方」と、ちよつと迷い出す。それぞれの形の横に良いと思つて手をあげた子の数を書き添えてみる。形の中へ想像だけで書いてみるのでは、まだピンとくるものは少ない。数にはバラつきがある。イメージ通りに結び付かないのは当然である。

<資料A>



その後、それぞれの形の中に字を書き入れてみる。幼児は本当に楽しそうに笑ったり、声を出してどこが良くないと、批評家に早変わりする。自分の意見もどんどん言うようになる。しばらく話し合って、一つずつ良い形かどうか皆で確かめ合うと、皆の納得の出来る説得力のある良い形を見付け出すのです。

〈資料B〉



(5) 字を書く

白い紙は、ドキドキさせる魅力があります。想像の字を実際に書き出す瞬間は、幼児でなくとも勇気のいる行動です。「静」の心を取り戻すよう、講師はさつき迄のフワフワしたものを無くすための「間（ま）」を大切にしています。心を落ち着けて集中し、筆を選ぶ。そしてその中には、伸び伸びとした力強さの必要なことも語りかけ、紙に向かわせる。講師の心配りを幼児もちゃんと受け止めてくれるのです。皆が皆そうなってくれば文句はないが、小さく書く子、弱々しい子、はみ出してバランスが取れない子、様々である。でも、一生懸命がととも嬉しい。

(6) ホッと一息

字を書き終り、お片付けの前に、指遊びをすることもある。その日書いた字がつく文字を黒板いっぱい並べ、その中の動物を取り上げて指遊びにする。

この指 ちびすけ 市場へまいった
 この指 ちびすけ おるすばんでござる
 この指 ちびすけ 牛肉あぶった
 この指 ちびすけ なんにも もたなんだ
 この指 ちびすけ ワンワンワン
 みんなで いっしょに よいところしよ

歌いながら、さつきまでの緊張感から解き放たれホッと一息ついている。指遊びは、自分の手の汚れを見るのにも、とても良いのです。汚れの少ない子は誇らしげに、いっぱい汚れてしまった子は、ア～アという顔になっています。

(7) お片付け

筆や下敷きは、教師の用意した箱の中にきちんと並べて置きます。共同のお片付けの場所では幼児の個性が出てきます。異常な程にいていねいに片付けていく子、ポイト

投げ入れてよく注意される子、他の子のもなおしていつてくれる子、「〇〇ちゃんがいいのにしてない！」と言いにくる子、様々である。道具の片付けが終わると、拭き掃除をする。手早く自分の道具を片付けた子が、教師の手伝いをするのです。どんなに気を付けていても、机の上や床に墨がこぼれたりして汚れることがあります。教師の手伝いを喜んで自発的にする姿を、いつも講師は、ほほえましいことと感心して見ています。

3. 幼児期の書道

幼児期は、御存知のように、繰り返しを好む時期です。「もう一ぺん」と何度も、せがんでくるのがこの時期です。らせん状の発達をみせる幼児には、週1回の積み重ねで、成長の小さな階段を埋めていつていると思われまふ。一年間の成長、二年間の成長とみていつた時、この子達は、皆天才なのではないだろうかと思ふ程のものがあるのです。皆それぞれに、「りっぱな字ね！」とほめてあげたくなる字を書くのです。いえ、書こうとしていつているのです。物事に取り組む時の一番大事な姿勢を、書道を通して学び取れるように思えます。幼児期の体験で、書道は良い精神鍛錬の場となつていつていると思ふます。「静」の時間がだんだん持たなくなつてきた今日では、よけいにそう感じまふ。

4. まとめ

先にも述べたように、皆が皆スムーズにいくとは限りません。後片付けの失敗から、廊下まで墨をこぼしてポタポタと汚してしまつた子、友達とケンカをして、筆を持つていつているのを忘れ、手を横に出したはずみで、カーテンに墨をつけてしまつた子もいます。教師が気を付けるよう注意すると、泣き出しそうになる子もいます。そんな幼い子供達なのです。細心の注意をはらつて見ていないと成長が見つけれられない程の子もいます。しかし、その大きな虫めがねが必要な程の成長しかない幼児に目を向け、小さなものも大いに評価してあげた時、とても大きな喜びで幼児は大きくふくれ上がるのです。日々の園生活の遊びの時と同様に、教師や講師の言葉掛けは、幼児の栄養剤です。

書道に対する幼児の姿は、興味そのものです。芸術作品を作り出す小さな書道家です。今回は何を書こうか、次回はもつとりっぱに書こう！と次々に関心も深まつていつきます。園生活を中心に幼児の姿を、1本の木に例えたならば、書道の積み重ねは、あつちへもこつちへも四方に大きく伸びていく枝々かもしれまふ。そして豊かな心の葉っぱを、いつぱいに繁らせて、ぐんぐん育つていく。そんな気がしまふ。園生活で育つた木々が、ずいつと青々とした葉をいつまでも枯らすことなく伸びていつて欲しいと、いつも思つております。

<参考資料>

平成 2 年度

	課題	年 長 児 (5才児)	年 中 児 (4才児)
4月	こい	いし こま	こ い り
5月	つち	くつ ぼち	つ ち
6月	くろ	くし いろ くま	く ろ しろ
7月	たけ	たい こけ たき	たい こけ
8月	かに	かい にじ しか	にし かい
9月	ほし	ほり うし にし	くし うし
10月	きり	きく くり かき	つり くり
11月	もん	もり くも ほん	いも くも
12月	ひと	ひる とり とし	とし とり
1月	あさ	あり くさ さけ	さい あり
2月	まめ	まつ つめ かめ	まつ つめ
3月	とり	とき まり ひと	とき まり

平成 3 年度

	課題	年 長 児 (5才児)	年 中 児 (4才児)
4月	くし	くま うし くり	く し
5月	てつ	つき くつ てん	て つ り
6月	いけ	いと たけ さい	い け こ
7月	たき	たこ たに きた	たこ つき

生徒の中の毛筆指導 — 障害児をもって —

加賀市立山代小学校 教諭 陰元外美栄

1. はじめに

誌上発表をするにあたっては、多年にわたる指導歴と豊かな経験が最も大きな基盤となり、ここに発表するに至る結果が生まれるのが自然な姿であるが、私の場合は、これに大きく反し、今年度はじめて体験する特殊学級担任としての毛筆指導なのである。以下その指導の一端を記してみたい。

2. 児童の実態

在籍児童	障害の程度	身体の状況	書写指導における実態
5年男1	軽度精薄	身体障害なし	視写することはできるが形をみて写し書きするだけのことで、筆順はごく画数の少ない字であってもメチャメチャ。転入してきたばかりなので、矯正するには、相当の労力と指導時間を要すると思われる。毛筆の経験は浅い。
4年男1	軽度精薄	筋ジス 左効き	字形や筆順は教わった通り忠実に書こうと努力はする。しかし形通りのもので、はねやはらいの技術的なことは望んでもむりである。筆順も漢字になるとすぐにくずれてしまう。毛筆の経験は殆んどない。
通級児童 4年女1	軽度精薄	身体障害なし	視写は速くできるようになったが乱雑である。とくに漢字は、はじめから「わからない」といってあまり努力しない。

3. 指導にあたって

遊びのほかは、あまり興味を示さない彼等は、書くという作業など殆んど好まない状態である。このような実態を克服し、毛筆や硬筆の正しい基本を身につけさせるには一体どうしたらよいのだろうか、悩みの多い毎日である。

かつて、私共が中学生になったとき、新たな教科をはじめて学ぶという興味と関心か

ら英語の時間を待ちこがれたのに似て、「新しく習うもの」という感覚で興味をひき、習字はまだかまだかと意識して待たせた。

しかし、通常学級に比べれば、準備や後始末の指導にも時間を要するわけで、3時間続けて学習ができる日を見つけ、それも3名の児童が揃っている時間を設定してはじめることにした。

4. 題材を決めるにあたって

- (1) 曲がりや結びを要求するひらがなより、むしろ漢字の筆使いになれ、正しい筆順を身につけさせたい。
- (2) 生活の中から親しみの深い漢字（習っていなくても時々目につく漢字）を題材として選びたい。

笹の葉に短冊をつるすという古くからの習慣を再現させるのもよい試みであるが、作品展示用の掲示板を3枚の書と紙製の星や笹の葉でうめつくす計画を立てた。

こんな理由から題材を「七夕」とした。ひらがなをようやく読める様になったばかりの丁児については、教師から「天の」までをはじめに書いて準備し、その下にたて画3本の川を書かせることにした。

5. 指導の実際

題材 「七夕」と「天の川」

- (1) 用具の出し入れ — 決められたロッカーに、2ヶ月も前から置いてある用具を取り出す。
- (2) 墨の準備 — 児童が水道の蛇口まですずりを持ち運びしなくてもすむ様に、教室内の床面に新聞紙を敷き、その上にポリバケツを置いてその中の水を水差しを使ってすずりに入れる。（このやり方は全学年通してどの学級でも行っている）
墨は水からすりはじめ、一定時間すったあと、うすいと思われるものだけ教師の方から墨液を加えてやる。
- (3) 書に移る — 指導上特に気をつけたこと
 - ア. 筆に墨をたっぷりふくらませることは大事であるが、岡の上で十分ほ先をそろえてから書き始める。
 - イ. 一文字書き終わるまで、先をそろえるのはよいが墨を改めてつけない。
 - ウ. 第一画の始筆は、紙のどの位置がよいかをはっきりつかませる。
 - エ. 「七」の第二画の曲がり具合をおぼえさせる。
 - オ. 「夕」の第一画、二画とも方向に気をつけさせる。第三画は中の方へ入りこまない様に気をつけさせる。
 - カ. 「川」の第三画は、児童の手を持ち、いっしょに書いて方向とはらいをおぼえさせる。※ 作品としては至って拙いものではあるが、ここに作品を載せて指導の実践としたい。



6. おわりに

- (1) 一教材の指導のみの実践発表に過ぎないが、このあとも、文字を正しい形に書くには、筆順がいかに大切であるかを理解させ、一度誤って覚えた漢字などは容易に直らないので、特に間違いやすい漢字を十分注意して指導していきたい。
- (2) 題材は教科書のみならず、興味のあるもの、また生活に密着したものの中から積極的に選び、意欲を持って取り組めるよう工夫する必要があると思う。
- (3) 小筆を使つての学習はまだ望めないと思ったので、名前はフェルトペンを使用させたが、名前の指導も書き初めの時期までには体験させたいと思っている。

以上、労力を要することと思うが、根気よく指導を続けていきたい。

低学年における文字意識を育てるために

金沢市立伏見台小学校 教諭 石野 昌子

1. はじめに

ここ数年、低学年の担任が続いている。低学年、入門期の子供達と共に歩んだ7年余りを振り返り、拙い事例の一端に触れながら、素朴な思いを伝えることが出来たらと思う。

「ひらがなは学校で教えますが、自分の名前は書けるようにしておいたらいいですね」というような話を入学説明会などでしたりしていると思うが、入学時には、ある程度の読み書きが出来る子供が多い。入学以前の幼児教育によるほか、絵本や兄弟によるという児童もいるし、テレビに映る文字の影響もあるようだ。2つの地域で、5回の入学児童を迎えたが、皆、そのような状態、背景があった。ところが、実際に書かしてみると、どの児童も、筆順はまちまちで、字形も愛昧で「はね・とめ・はらい」も不正確である。書く姿勢や鉛筆の持ち方もさまざまに不適切な児童が多かった。また、ほとんど書けない児童も数名いた。しかし、新しい学校生活に意欲満々の子供達。この意欲ある時期に、書写の基礎・基本を正しく身に付け、丁寧に書ける子に育ててほしいと願いながら、書写・国語の時間だけでなく、他教科、色々な活動の中で、あらゆる機会を通して、文字意識を育てよう…と、繰り返し指導を重ねてきた。

2. 実践例

(1) 姿勢・執筆

姿勢と鉛筆の持ち方は書写の基本であり、文字のよしあしを左右する。そこで正しい習慣が身につくよう、次の手だてを取り入れながら繰り返し指導してきた。(次のア、イは実際には関連し合うものである。)

ア、正しい姿勢づくり

(ア) 4つの約束

- ① 両足の間を少しあけ、足の裏全体を床につける。
- ② 机とからだとの間は、握りこぶし一つ入るぐらいあける。
- ③ 椅子には、握りこぶし一つ入るぐらいあけて座り、腰、背中を伸ばす。
- ④ 左手は、左乳の前あたりに置いて、紙に添える。

(イ) 姿勢のいい児童を誉めることが、いい見本となり、また励みにもなり、効果があったようだ。

イ、鉛筆の正しい持ち方

(イ) 鉛筆を正しく持つことは、文字を正しく書くための基礎的条件であり、上達も速いというようなことを児童に話しながら、繰り返し指導してきた。親指、人差し指、手首を自由自在に動かせるように縦線、横線を引く鉛筆体操も取り入れたりもした。



- ㊦鉛筆の削りぎわに近いところを持つ。
- ㊧人差し指がかどばらないように。
- ㊨親指の先が人差し指の先より下がらないように。
- ㊩親指の曲がり方に気をつける。

ウ、書き始める前の合い言葉

- (ア) 5点確認① 足よし。 (姿勢) 初めは5点確認でやっていた
 ② 机、お腹よし。 (＃) が、他の授業などで心の持ち方
 ③ 椅子、背中、腰よし。 (＃) をいつも大切にしていたので、
 ④ 左手よし。 (＃) 子供達から「心も入れよう」と
 ⑤ 鉛筆よし。 (持ち方) いうようなことが出てきたので
 6点確認⑥ 心よし。 (心構え) 取り入れて6点確認になった。

(2) 書写指導の効果的

ア、正しい筆順で書くために

(ア) 色分けによる筆順指導

正しく整った文字を書くために、筆順指導が大切である。筆順は色分けで示している。ここ数年は、チョーク総出演で、1画目は赤、2画目は青、3画目は緑、4画目は黄、5画目は茶、6画目は白の6色を繰り返し使っている。白の所は、子供達のノートは黒にという約束になっている。

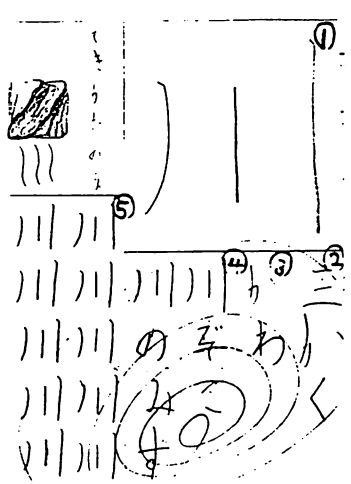
(イ) 空書、呼唱を取り入れた筆順指導

空書をしながら、筆順を体で覚えさせるようにしている。教師と児童が向かい合い、教師は左手で裏文字を書いたりもしている。その際、画数を唱えさせるだけでなく、「とめ・はね・はらい・おれ・まがり・そり」などの部分を意識させるため、唱えさせている。ただ、「そり」については、2年で「そり」の指導をした際に、子供達が、「これから、こんなとこ『そって』といえるね」と言い、その時点から取り入れた。他のところは、それまで、「…とめる」「…はねる」「…はらう」「…おれて」「…まがって」という言葉を取り入れて唱えてきている。

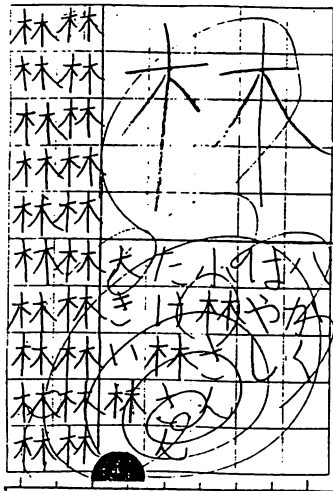
(ウ) 漢字ノート

a. 1年時のノート (10マス7桁、179×252mm) の実例

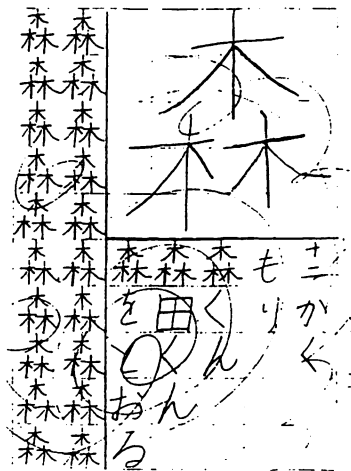
1年では、1ページで1文字の練習をした。5マス×5マスで大きく書いてある所は、パスやカラースティック等で色分けで書いたもの。紙黒板的な面があり、児童が座席で上げて見せて、教師が全体を把握することも出来た。



(T夫のページ)

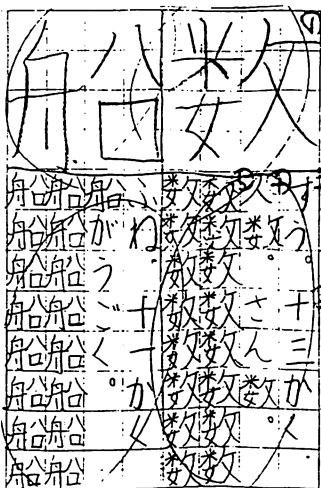


(K子のページ)

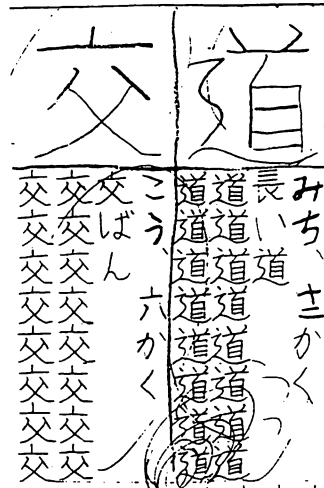


(H夫のページ)

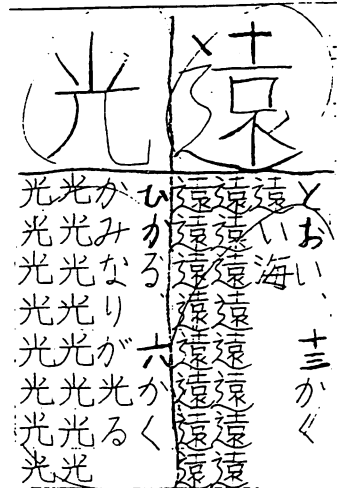
b. 2年時のノート (12マス8桁、18ミリ) の実例
2年では、1ページで2文字の練習をした。



(K子のページ)



(H夫のページ)



(H夫のページ)

上図に打ってある番号について、①筆順を色分けして大きく書く。②読みがな、③画数。④言葉集め。⑤練習。④、⑤の部分は、家庭学習になることもあった。ノート指導では、初めが肝心なので厳しく見たので、〇がもらえた時、一度で合格した時などの喜びようはとても大きく、感動的なひとときもあった。

(E) 漢字色分けカード

八つ切り画用紙を6分の1に切ったカードに、フェルトペンで筆順を色分けして一文字ずつ書き、新出するたびに貼って行った。児童の中から、以前に貼ってある漢字と、新しく貼った漢字を合わせて、漢字の熟語が飛び出してきて、豊かに広がり、面白いひとときとなったこともあった。

イ、文字の形を整えて書くために

(7) 4ます黒板

始筆の場所が悪いと字形が乱れるため、補助線で仕切られた4つの部屋に番号をつけて、始筆の場所が何番の部屋か確認したり、それぞれの点画が何番の部屋か意識させたりもした。

(4) 示範

チョークで太めに点画を書き、「とめ・はね・はらい」などの点画のようすや速度が、よくわかるようにした。記号を作って用いたりもした。筆を使って、水で書いたこともあった。いずれも児童には、興味深いものがあったようだ。

(9) 外形づくり

□ △ ▽ [] ○ ◇ …など

ウ、ア・イどちらにも通じ、他のねらいの理解にも迫れるもの

(7) 板書、指書き、なぞり書き、写し書き。

(4) OHPの活用。

(9) 紙黒板（個人用）。

(E) 点画カード。

(4) 練習用紙の工夫（ねらいに合ったもの）。

(4) 評価カード、批正カード、竹ひご…など。

3. 授業実践例（一昨年6月と今年7月に指導案を少し変えて実践したもの）

第2学年国語科（書写）学習指導案

指導者 金沢市立伏見台小学校 石野昌子

1. 単元 画のながさと字の中心

2. 目標
- ・画の長さに注意して、漢字や短文を書くことができるようにさせる。
 - ・文字の中心に注意して、漢字や語句を書くことができるようにさせる。
 - ・かたかなの五十音を字形や筆順に注意して、ていねいに書くことができるようにさせる。

3. 指導にあたって

字形を整えるためには、いくつかの要素がある。本単元で扱うのは、その中の「画の長短、文字の中心」であり、第2学年で初めて扱う内容である。字形を整えるために、文字の中心になる点画に注意して書くことは大切なことである。漢字だけでなく、平仮名、片仮名についても同じことがいえる。中心のはっきりした文字と、はっきりしない文字があるので、どこが中心線上にくるかを具体的に考えさせ

たい。

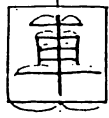



男子20名、女子15名、計35名。学級の児童は、書写の時間を楽しいから好きと喜んで取り組んでいる。2年生は、学習する漢字の数が非常に増え、書く量や速度が要求されてくるので、消化不良にならないように工夫していきたい。

4. 指導計画 (3時限)

- 第一次 画の長さ ……1時
- 第二次 文字の中心 ……1時 (本時)
- 第三次 かたかなのひょう ……1時

5. 本時の学習

- (1) 題材 字の中心
- (2) ねらい 文字の中心に注意して、漢字や語句を書くことができるようにさせる。
- (3) 展開

学習活動	時間	指導上の留意点	教具・その他
1. めあてをつかむ。 ・試書する。 ・試書したものをもとに話し合う。	5	・「車」を試書させる。 ・児童の作品をもとに、「車」の整った字形を考えさせる。	児童用紙黒板
2. 基準を知る。 ・四文字の中心を考える。	15	<字の中心に気をつけて書こう> ・中心について考えさせる。 「車」…文字の中心に縦画のある文字。  移動してみる。 ・縦画が字の中心に来ているか確かめる。(半分の分割赤線入りシートを左右交互にのせ長さが同じことを理解させる) ・紙面(ます)の中心との関係も考えさせる。 「室」…文字の中心となる点画がある文字。  「目」…文字の中心となる点画がない文字。  「谷」…文字の中心で二つの画が接する文字。 	文字カード 分解文字 赤い棒(ピン) OHP 分割赤線入りシート
3. 中心に気をつけて字を書く。 ・練習し、批評する。 ・清書する。 ・評価する。	20	・中心が理解されているか机間巡視する。(字順、その他の基準にもふれる) ・基準に照らして自己批評させる。 ・学習したことを生かして、ていねいに書かせる。(「車」「室」「目」「谷」) ・作品の中心位置に相当する点画が書けているかどうか。(用紙を折ってみる)	かさかたノート 児童用紙黒板 清書用紙
4. 生活化 ・仲間の漢字を集める	5	・文字の中心になる画が同じ仲間の漢字を見つけさせる。	文字カード
5. 次時のめあてを知る。			

(4) 本時の問題点 文字の中心をつかませる手だてはこれでよかったのか。

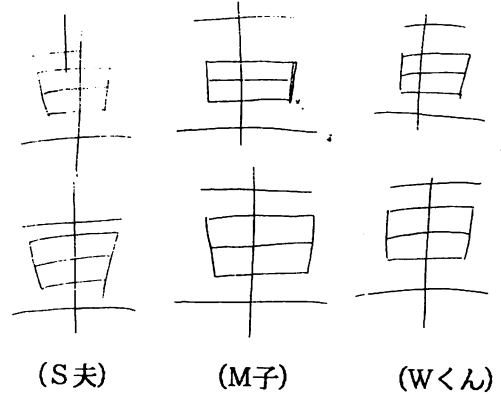
(1) 一昨年6月の実践より



「車」の試書
(白墨をつかって)
「先生できました」



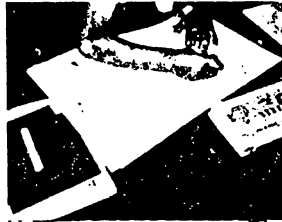
教育機器も利用



○紙黒板に全員が、導入段階で試書し、学習のまとめ段階に清書したもの。上の段は試書、下の段は清書。下の「車」は導入時の話し合いに使用したもの。

<導入部分の大まかな流れ>

- T. 「今日まず初めに勉強する時はね。先生が毎日学校へ乗って来る。」
- C. 「車」
- T. 「みんな書ける？ 書いてみよう。」
- C. (紙黒板に試書)
- T. 「はい、上げてみせて。」 (3枚黒板に貼り、あとの児童は机の上に立てさせる。)
- T. 「1画目は？」
- C. 「横」
- T. 「最後の画は？」
- C. 「縦」
- T. 「何画目？」
- C. 「7画目。」
- T. 「3人のお友だちの見てどうですか？
何でもどうぞ。」
- C. 「Mさんの3画目の縦画出た方がいい
と思います。」
- C. 「W君のも…。」
- C. 「S君の7画目が右に行き過ぎ…。」
- T. 「7画目どこへ行くといいの？」
- C. 「まん中。」
- T. 「今日はそのまん中を2年生になったので、難しくして、中の心と書いて、中心。その勉強をします。今日はこの中心に気をつけて書きましょう。」
- T. 「車の中心は？」
- C. 「7画目。」



えんぴつを
正しく持って



文字の中心となる
・点画のある文字
・点画のない文字
・二つの画の接する文字

- T. (点画カードを貼り) 「7画目置いてみて?」
- C. (児童操作) 「どうですか?」
- T. 「だいたいいいね。でもほんとにまん中かな? もっと大きく、虫めがねじゃないけど、OHPでやってみよう。どう?ほんとにまん中か調べてみよう。どうしたらわかるかな?」
- C. 「長さをはかっていたらいい。」
- T. 「先生いいこと考えた。(赤線入りシートを左右にのせる) やっぱりまん中やね。」
- T. 「じゃあ、紙の中ではどうかな? このまん中の縦画どのへんにあればいい?」
- C. 「まん中。」
- T. (赤線入りシートをのせてみる) 「やっぱりまん中やね。」～以下略～

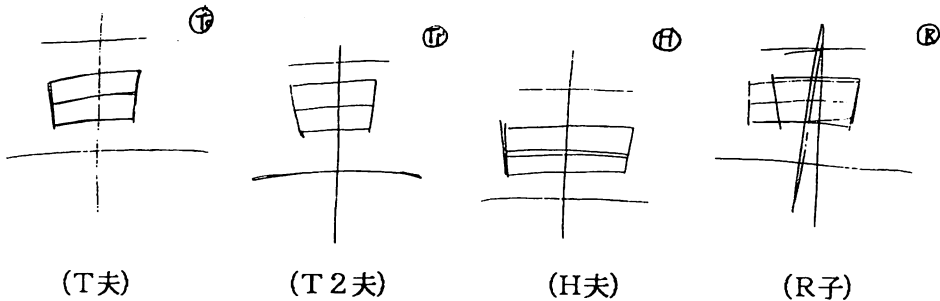


「先生、ほくのを
見てください」

この導入については、日常のノートから問題になりそうな例を出してやった方がより興味深くは入れるのではという迷いもあったが、上述のように入ってみた。

(2) 今年7月の実践より

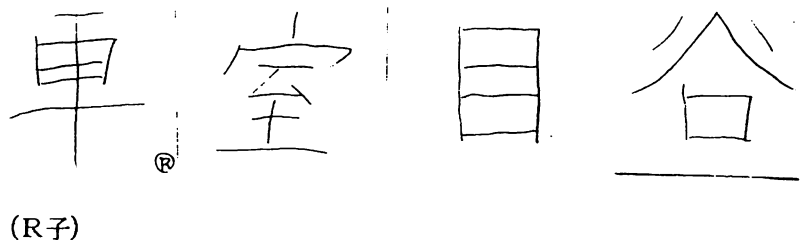
導入時に、小黒板に児童が書き、他の児童がどんどん直して行ったもの。



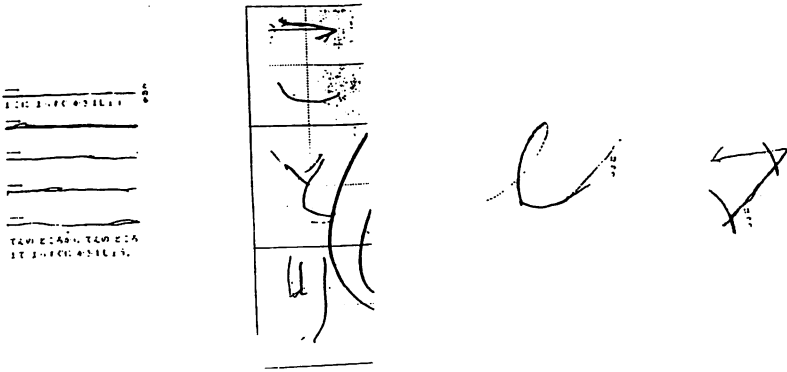
4人の友達を見て、子供達、少しのずれにも目をつけ、どんどん直していき、納得のいく文字になるよう、一生懸命であった。文字意識を持って意欲満々の子供達。みんなにまっ赤に直されてしまったRさんだが、その7画目のずれは本時のねらいに迫り、Rさんのおかげでいい導入が出来、Rさんもみんなの言葉をしっかり受けて頑張る、左端のような素晴らしい清書をした。

<清書>

こんなに
立派に、
書けるよ
うになっ
たよ!



4. H君の頑張り (入学当初～2年7月までの歩み)

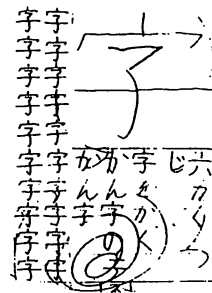
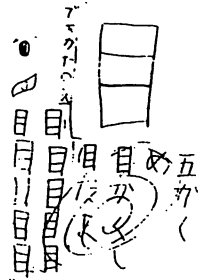
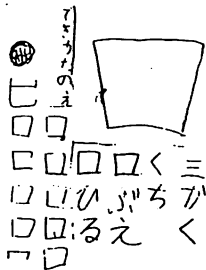


①線を引くのも四苦八苦していた入学当初。(上↑)

②ひらがなを習い終わって、丁寧に書くことを覚えた1年1学期。(右→)

ら	ら	や	や	ま	ま	さ	さ	か	か	あ	あ
り	り	い	い	み	み	し	し	き	き	い	い
る	る	ゆ	ゆ	む	む	す	す	く	く	う	う
れ	れ	え	え	め	め	せ	せ	け	け	え	え
ろ	ろ	よ	よ	も	も	そ	そ	こ	こ	お	お

ん	ん	わ	わ	は	は	な	な	た	た
		い	い	ひ	ひ	に	に	ち	ち
		う	う	ふ	ふ	ぬ	ぬ	つ	つ
		え	え	へ	へ	ね	ね	て	て
		を	を	ほ	ほ	の	の	と	と



③漢字が入ってきた1年2学期。初めは、形がうまくとれなかった。(上↑)

5. おわりに

入学当初は、姿勢、鉛筆の持ち方も悪く、線を引くことさえもどかしかった子供達。繰り返し指導と根比べの毎日であった。何度も何度も書き直させたこともあった。初めが肝心と、基本の約束等を徹底的にと、厳しい面があり、なかなか〇をあげないこともあった。が、〇をもらえた時や一度で合格した時などの子供達の喜びようはとても大きかった。「うわあ、やったあ。」「いっぺん合格や。」「わあ、すごい。」…と本当に頑張った真の喜び。山登りで頂上に達した時のような大きな感動に、ちょっと厳しすぎたかもと気にしていた心が救われた。子供達の本当に嬉しそうな顔に私もとても嬉しくなり、励まされた。

また、父親から「基本をしっかりやっていただいて、とっても喜んでます。私など、あのように書けません。」「上の子よりしっかりした字を書いているんですよ。…。」「子供の方がよく知っていて…。」等々という言葉を戴いたりしたことも大きな励みとなった。

6月に教育実習生が来た時の紹介の時にこんなことがあった。実習生が自分の名前を黒板に書こうとした時に、子供達が「僕達の習った字で書いてね。」というようなことを言った。実習生は、まだ習ってないと思ったのか、「みやの…」と、ひらがなで書いた。そこで、私が「この中にみんなの習った漢字が」と言うと、「あっ、石野先生の野や。」と、みんな。「書ける？」と聞くと、「僕、書きたい。」「私も書きたい。」と納得のいくまで（気持ちのいい字になるまで）直すという1コマもあった。また、国語の新出漢字に5月ごろ「声」が出てきた時、4画目と6画目の接し方で、今までの約束の接し方でいくと、教科書の活字に疑問が生じ、「こっちが出るのでは…」と関心を示し、もめたこともあった。（教科書の活字には、はっきり出してないものもあるようで）また、黒板に書かれた友達の文字についても、細かいところまで注意深く見るようになった。子供達の文字意識が育ってきている姿を見る思いがした。

文字に対する意識は、私自身の中でも、ここ数年、少しずつ変わって来ている。私の変化は子供達にも影響していると思われる。そのためか、現在持っている子供達の意識がより高く感じられる。が、まだまだ同じような注意を繰り返したり、普段のノートやプリントなどの字が乱雑な児童もいるという現状もあり、今後も多様な方法で繰り返し学習させ、指導の工夫と称賛を惜しまずに励まねばと思う。この数年の歩みから、教師自身の文字意識がいかに大切であるかということが、私の心に深く残った。

「楽しく学べる授業を目指した」一つの試み

金沢市立鳴和中学校 教諭 八田 和幸

1. はじめに

新学習指導要領では、書写が「表現」領域から「言語事項」へと移された。その意図するところは、「表現」に位置づけたことによる書道（高校の芸術的表現活動）的誤解を避け、「表現」「理解」の学習指導との関連を密にして、日常の書写力を強化しているとするものである。簡単に言えば、国語のノートを取る時などに、正しく、整えて（読みやすい字で）、速く書けるようにしましょう、というものである。展覧会や競書のためではなく。

また、今回の研究大会のテーマは「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」——楽しく学べる授業を目指して——である。楽しく学ぶには、「よし、これをやってやろう」という強い意欲が不可欠である。その意欲をどうやって引き出すか、それを考えてみたい。

以上の2点より、中学一年生一学期の終わりに、楷書学習の総まとめとして、次のような授業を試みてみた。

2. 指導の実践

生徒は一学期の間、毛筆大字の教材として、「春風」「流星」「緑化運動」を書いてきた。その際の練習方法としては、以下の資料のようなプリントを用いて、籠書き、骨書きから練習を始めてきた。加えて、1時間の授業の中では目標を一つとし、2時間にわたって学習する際は、同じ教材であっても、目標を違えて学習してきた。例えば「流星」の場合なら、1時間目は、点画の方向に注意して書くことを目標とし、2時間目は、文字の左右、上下の大きさに注意して書くことを目標とした。評価もそれに従って行い、単に筆使いが上手であるとか、形の取り方がよいなどといった、いわゆる、うまい、へたの基準のみでは評価しないよう気をつけた。

また、練習のためのプリントはザラ紙などに印刷したのだが、一度書いて、あとは、あまり利用価値がないため、まっさらな紙を使うのはもったいないので、印刷室にダンボール箱を置き、他の教職員の協力を請い、ホゴになった紙を集め、その裏に印刷した。

一年
春風

一年
春日風

一年
流
運
建

ていねいに力強く

一年
流
日
生

点画の方向に注意して書く。

一年
〇
〇
〇
〇

文字の長短・正字の大きさに注意して書く。

一年
運
緑

一年
運
緑

〇
〇
〇
〇

〇
〇
〇
〇
動
化

〇
〇
〇
〇
動
化

〇
〇
〇
〇

(1) 実践そのⅠ（自分で字句を決めて書く）

籠書き、骨書きの利点は、①生徒達が塗り絵感覚で、おもしろがって取り組む。②字の大きさ、太さがつかみやすい。③段階的に取り組める。④教科書を写して拡大コピーするだけで、手軽にプリントが作れる。欠点は、①線の勢いがなくなりやすい。②清書作品を作るためだけの練習となりがちである。③印刷するため、ザラ紙を使わざるを得ず、一般の書道半紙と紙の感触が異なる。④与えられたプリントをこなすだけの受け身的な授業となりやすい。等が挙げられる。

これらの問題点を踏まえた上で、楷書学習の総まとめとして、自分で字句を決めて書くという授業を設定してみた。ただし、無制限に一人一人が別々に書いても、指導が入れにくい。よって、前時に宿題として、自分の好きな言葉を漢字二字～六字で考えてくるよう指示しておいた。それをみんなの前で発表し、みんなの承認を得たものだけを書いてもよいことにした。これによって、大分、数を減らすことができるし、更に、候補を五つに絞ろうという制限を加えれば、指導者の負担も減る。この字句発表の時間が、生徒達にとっては興奮する瞬間のようだ。「風林火山」「極楽」「焼肉定食」「勇気」「蹴球」「優勝」「友情」「優美」「甲子園」……e t c. 少々ふざけたようなものや、それなりに真剣に考えたもの、教室のあちこちで、「あっ、オレやっぱり、風林火山にしよう」とか、「絶対、焼肉定食にするゾ」なんて言っている子もいる。字句選びの中で、子ども達の語彙力や考えていること、関心のあることなどがすぐ表われるからおもしろい。字句が決まり、半紙いっぱい到手本なしで練習を始める。しばらくすると、二極分化してくる。どうしてもうまく書けずに音をあげるものと、うまく書けないのでどうしたらよいのかとアドバイスを求めてくるものの二つである。前者はややいい加減に字句を決めたもの、後者は真剣に決めたものと大ざっぱにそう見て取れた。その時のアドバイスは「教科書を見なさい。今までの授業を思い出ささい」とだけ言い、以下のことを板書した。

- ① 文字の中心と、始筆、送筆、終筆の筆使いに注意して書こう。
- ② 文字の上下、左右の大きさや、点画の方向などに注意して書こう。
- ③ 文字の組み立て方に注意して、字形を整えて書こう。

具体的にアドバイスするのは簡単であるが、今回の授業は、あくまでも自分の力で習ったことを基に工夫し、より良いもの（字）を求めて前進してってもらいたかったのである。最も高度な学習形態である、と言われているが……。

(2) 実践そのⅡ（5枚の清書）

今回の授業に限らず、清書の時は5枚提出させることにしている。紙の隅に、何枚目に書いた作品かを記し、自分で一番良いと思うものから順に並べて提出させている。自分で決めかねる場合は、クラスの他の子に見せて意見を聞かせている。自然な形で、自己批評、相互批評を行わせたいと思ったからだ。また、ある程度急いで、なおかつ、数多く練習させるという意図も含んでいる。一番下になる作品は、何度も書き直した練習のものでもよいし、先生が手取り法で一緒に書いた作品でもよいことにしている。書くのが遅くて、時間的に5枚仕上げられそうにない子には、手取り法をすることによって手助けし、最後の一枚、二枚に集中できるようにさせている。ていねいに書いてあって（先生が見ればスグわかるとハツタリをかましておいて）、7、8の数字も

まざっていれば、その日の目標にした観点にプラスして評価を高くしておくよ、と言っておくと、結構、子ども達はがんばる。自分の書いた作品に、その日の目標にした観点で自分で判断して順位をつける。また、いつも一番目に書いたのが一番上になるとか、一番最後に書いたのが一番よいか、自分自身の性格傾向をつかむ一助にもなる。1枚だけの清書作品提出より、一人一人の子の葛藤や工夫が読めて楽しい。

① ② ③ ④

④ ③ ② ①

一年六組 鳥居良子 一年六組 鳥居良子 一年六組 鳥居良子 一年六組 鳥居良子

希望 希望 希望 希望

① ② ③ ④

④ ③ ② ①

六組 的場弓子 一年六組 的場弓子 六組 的場弓子 六組 的場弓子

希望 希望 希望 希希

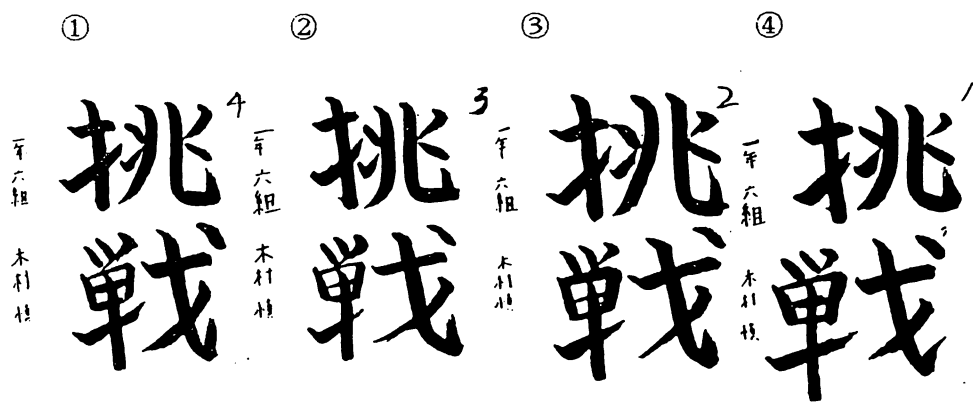
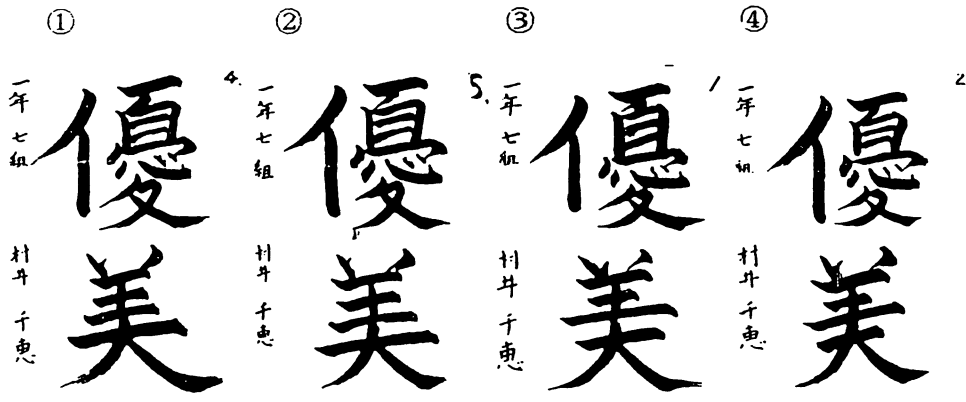
① ② ③ ④

② ① ⑤ ④

一年 横町千雄 一年 横町千雄 一年 横町千雄 一年 横町千雄

火風 火風 火風 風

山林 山林 山林 林



本人が決めた優先順位

右肩の数字は何枚目に書いたかを示す。

3. おわりに

21世紀の書教育はどうあるべきか。今ある文化、学習遺産を継承するだけでは物足りない。ある人の意見によれば、決められた一本道をつつ走る教育ならば、できる授業、わかる授業だけで十分である。しかし、自ら道を開くための教育、道を開くたのしみを教える教育を目指すなら、たのしい授業が不可欠である、と。書写に置き換えて考えるなら、お手本があって、それを模倣し、筆を扱う技術だけが上達しても、まだ不十分である。大切なのは、筆を持って、まっ白な紙に対峙し、どの位の太さで、どの方向に筆を入れ、どれくらいまで伸ばすか。迷い、逡巡する、その時に決断し、筆をおろし、文字を書くことだ。そこに成長があり、書教育の意義がある。さらに、より良い文字を書こうと練りあげていく、その姿勢に価値がある。

自分の好きな言葉を書くということは、お手本がないということだ。頼れるのは、自分だけである。自分が身につけた技術を総動員して、最善のものを目指す。子ども達にその姿勢ができたとは、十分に言えないものの、臨書ばかりでなく、このような力試しの授業があってもいいのではないか。試されるのは、教師の方でもあるが。

障害を持つ子の書写指導

—ちえ遅れの子どもたちへの試み—

石川県立明和養護学校 教諭 鏑木 由美

1. はじめに

4月に、高等部1年生の「生活」の授業の中の国語的内容を担当することになった際に、この子たちに書写指導を中心とした授業を行ってみたいと思いたった。従来の「生活」の国語的内容の授業では、生活に密着した内容で、例えば自分の住所や名前を書けるようになるための指導や、暑中見舞・年賀状を書く練習なども行ってはいたが、書写を重視したものではなかった。

ちえ遅れの子どもたちの中で、文字を書くことを大変苦手に思っている子は少なくない。それは何故であろうか。理由として、ひらがなを正確に身につけていないこと、板書・手本などを写す場合のじっと見るという注意力・集中力があまり育っていないこと、文字を書く場面を今まであまり経験していないために自信がないこと等々、いろいろあげられる。

そこで、基礎的な字をいろいろな筆記用具（鉛筆・ボールペン・筆ペン・毛筆）を使って書くことによって、生徒達があきずに、楽しみながら字の基本的なポイントをおさえられるのではないかと考えた。また、これまで鉛筆のみで字を書いて苦手に思っていた生徒も、筆ペンなどを使うことによって、書くおもしろさや興味を覚え、生徒自身の意欲を育て、自信をもたせるのではないかと考え、1年を通して書写指導を中心に行ってみた。この1年間の取りくみを振り返り、ちえ遅れの子どもたちへの書写指導の必要性について考えていきたいと思う。

2. 生徒の実態

本校の高等部は、生徒数も多く障害の程度も多様化しているため、各学年を単位としたABCの計9コース（3学年×3コース）に編成されており、その中で書写指導を試みたのは、1年Bコースである。1年Bコースは、男子6名女子9名計15名で構成されている。本校の中学部出身が3名で、それ以外は普通中学や普通中学の特学出身者であり、自閉的傾向をもつ生徒も数名いる。生徒達は日頃から鉛筆を持つ機会は少なく、普通中学出身者で、書写を経験してきた者は半数で、筆ペンは全員初体験であった。

自分の名前は読めるが正しく書けない生徒が2名。一方で小2程度の漢字を使って文章を書ける生徒が4割近くいたが、間違った字形を覚えている生徒が多かった。

3. 実践例

(1) 鉛筆（ひらがな）

まず、鉛筆でどれだけ整った正確なひらがなが書けるか試してみた。大きなマス目の紙に五十音を書かせたところ、半数以上の生徒が五十音を全部正確につかんでおら

ず、特に「ら」「れ」「ぬ」「を」を間違っ覚えていた生徒が多かった。赤字で直し、何度も間違っている字を練習させたが、効果はあまり得られなかった。

(2) 筆ペン (創作詩)

次に、鉛筆のみで、ひらがなばかり書いていても意欲が高まらないだろうと思い、詩をつくらせることにした。生徒達が一番とりかかり易い題材として、季節をとりあげた。春・夏・秋・冬とそれぞれ季節を追いながら1年かけて作っていくことにした。

「春」について何を思い浮かべるかを自由に発表させた。あたたかい・入学式・さくら・チューリップ・花見遠足などとあがったものを板書し、授業のおわりに太い縦線の入った紙にしっかりと鉛筆で書き写させた。次の時間には、それぞれ書き写した紙を読んで発表して思い出させたのち、線の入っていない紙に、自由に「春」についての詩を創作させてみた。自閉的傾向の生徒にとって創作は大変むずかしいため、思いついた事柄を羅列させるという手段をとった。

あらかじめ一人に1本ずつ筆ペンと、色紙大の白い厚紙を準備しておき、鉛筆で書きあげた詩をすぐに清書させてみた。原稿用紙大の下書きから、色紙大の中に清書することにより、生徒達はまず字の大きさや配分を彼らなりに一生懸命とりくむこととなった。「春」の時には、色紙大に書けずはみ出したり、反対にミミズのはったような小さな字で書きほとんど白紙に見えた生徒もいたが、夏・秋と回数を重ねていくごとにきちんと色紙大に書き写せるようになった。

また、今まで全く使ったことのなかった筆ペンで書いてみて、鉛筆のような硬筆ではないやわらかい筆先のタッチに興味を示す生徒が何人もあらわれた。そして、筆先のはね具合によって、いつもの自分の字が全く違う字に変わるのを見て、鉛筆で日頃無造作に書いていた字を、あらためてじっくりと字の形を認識する結果となった。鉛筆でいい加減な「ら」や「れ」を書いてきた生徒も、筆ペンでは何度も上から書き直せるため、正確に書こうと試みていた。

できあがった作品(創作詩)を廊下に掲示することにした。これは生徒間の刺激になり「今度はもっと上手く書くぞ」と意気込みを見せてくれた男子生徒もいた。また先生方の間でも、健常児では見られない独特の味がある作品の出来映えに反響をよんだ。

春・夏・秋・冬と季節を追って、同じことをくり返し行っていった結果、4月の段階でひらがなが正確に書けなかった生徒が、落ち着いてじっくり筆ペンで詩を清書したことにより、五十音のほとんどを整った字で書けるようになった。また、自分の名前のひらがなぐらいしか書けず、そのため書くことが苦手でいやがっていた生徒が、字への思いを高め、夏休みや冬休み中に自発的に絵本の書き写しを行い、字を勉強することが大好きになっていた。

<生徒作品①>

冬 高16H
 雪がもともも
 降ったりみん
 なで雨だるまを
 にくたり雪合戦
 をしたりい
 なのあたりい

中村博司 8月

(3) 毛筆 (かきぞめ)

毎年1月になると本校では、かきぞめ大会が催される。従来は書き初めということで1月中に1回日を取り、クラス単位で行っていたのだが、今回は1年Bコースにおいては書き初めの練習をかねて、11月頃より毛筆の授業に取り組むこととした。

半数の生徒が毛筆は初めてで、書道用具を新しく揃えてもらい授業を始めた。最初に、机上で用具のおき方から指導した。硯や筆、下敷、文鎮の配置をよく覚えさせ、半紙の裏表を学習。墨のつけすぎや、筆のおろし具合がわからず、大筆で小筆位の字を書く生徒もいたが、ともかくも始めた。

毛筆ではひらがなよりも、漢字の方がとらえやすいと考え、半紙に二字の簡単な漢字を練習させることにした。生徒の実態にあわせ3~4種類の手本を用意し、鉛筆でひらがなを満足に書けない生徒には、手本の上に半紙を重ね、なぞり書きをさせて筆に慣れさせた。中学で書道を経験してきた生徒は、筆の扱いには慣れているのだが、筆順がまったく違っていたので、板書で正しい筆順を確認させた。そして、字配りや大きさなどを特に注意するよう導した。

<生徒作品②>

夏
 あつい あつい
 せみがありにち
 なりている
 しろしろ
 ほんおどりの
 きせつが
 ちてくる

柴田信子

<生徒作品③>

海へ行く時
車に乗って行く
山へ行く時
車に乗って行く
ボートへ行く時
車に乗って行く
ウイロン茶を飲む時
コップを持って行く

夏

尾上 夔

<生徒作品④>

雪がふつたり
アゲイスリースト
ガイズリースト
スガイズリースト
たのしみだ
のきりし
たのしみだ
な

冬

吉原川中川順子

4. おわりに

試行錯誤の短い1年間の指導をまとめてみたが、思わぬ成果をあげられたのではと自負している。高等部に入ると、卒業後社会に出て自立するための生活に密着したものに授業がおかれる授業の中、書写指導はかけ離れているものにとらわれたかもしれない。しかし、鉛筆以外の筆ペン、毛筆等を使ったことにより基本的な字の見直しができ、また字を書くのを億劫がっていた生徒も、毛筆のおもしろさを知ることにより、すすんで字を書く勉強をし始めている。

この1年間の書写指導で、鉛筆の下書きから筆ペンでの清書、手本から半紙へという、左から右への模倣ができるようになったこと、すなわち手本などをじっくり見るという注意力、集中力が育ったこと、また紙の大きさや筆の太さによって字の大きさ、配分を考えるようになったこと、そして何よりも落ち着いて静かに、真剣に字を書くという緊張感を覚えたことは生徒達にとって大きな収穫ではなかったであろうか。

最後に、ちえ遅れの子供たちがもっとも自信と意欲をもって書写に取り組めるような指導の工夫を続けていくことを、今後の課題としていきたいと思っている。

書道Ⅱにおける篆書指導

石川県立金沢錦丘高等学校 講師 本多 美千子

1. はじめに

本校の芸術科書道は、一年時に二単位、二年時で一単位を履修しております。書道Ⅰでは一学期に楷書を、二学期に行書と隸書を、三学期に仮名を学習します。

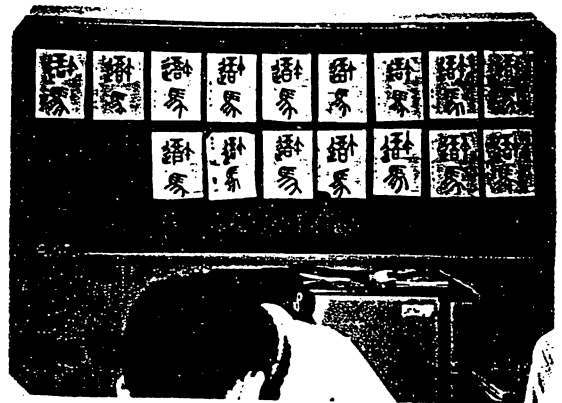
書道教室がない為新学期は、一年生が落ち着いて書ける為の雰囲気づくりを考えます。机は教科書、硯、下敷(半紙)で一杯になってしまうので、硯は小・中学校で使用していたのを使わせています。筆は全部おろして書く指導をしているので、手入れが充分にできるようにバケツを用意します。一個のバケツが毎時間フル回転するので、当番を決め、次の授業の支障にならないよう徹底させます。係ばかり決めるので少し大変ですが、あと試書した作品を教室の黒板に掲示して全員で批評をしあうことも試みしています。何分にも古い黒板のためセロテープしか使用不可能なので係を必要とします。それと合併クラスなので、書道の時間だけの委員長を決め号令をかけてもらいます。この人選によりクラスのムードが決まるので慎重に選ぶことにしています。

以上のようにして、新学期の最初は、普通教室の不便さをお互い協力し合うことを約束して、私の授業に対する姿勢を理解してもらうことからスタートします。

2. 書道Ⅰの指導の概要

生徒が学校に慣れて、落ち着いて授業ができるようになったころをみはからい、古典に少しずつ触れて行くことにしています。生徒達は音楽で古典の鑑賞は経験していても、書道では全く想像すらしていないので、不思議がる子がほとんどのようです。そこで私はあせらずに、教科書に掲載されている古典のほとんどが白抜き文字の理由から話しを進めていきます。次に文字の成立を話します。年表をできるだけ活用して、歴史的背景が理解できるようにしています。

実際の古典学習では、単元ごとに鑑賞の時間を設けて生徒の意見を聞きます。その際はわかる範囲で作者の人となりや、碑の由来などを話し、鑑賞してからは、あくまでも生徒の第一印象を重んじ、既成の理論は押しつけないよう努めます。じっくり鑑賞させて、臨書した作品は、掲示して相互批評をしてから清書へと展開していきます。清書の際にもあまり口出すことは避けて、試書作品



(掲示してある作品)を見ながら自己批評して仕上げさせることにしています。このこ

とを、何回となく繰り返していると、一学期の中頃にはすっかり鑑賞することにも批評することにも慣れて、授業にリズムが感じられるようになります。

以上、鑑賞と批評を繰り返し、臨書中は机間巡視をしながら生徒の筆で示範したり、筆使いを思うようにできず困っている子には手を取る等してアドバイスします。高校生は身体が大きいので机の右側に立って手を取る方法は圧迫感があるので左側からか、スペースがあれば前に立ち、手を添えるようにしています。全員が楽しみながらかけるようになる迄の試行錯誤は、惜しまずにやることに努めています。

三学期終了時には、一学期の最初に半紙で各自の住所、氏名を書かせて、こちらで保管しておいたのを返却するようにしています。その時の生徒の反応を伺うことも毎年の楽しみの一つとなっています。

一年間を終えてみると個人差はあるようですが、書道Ⅰで書体の成立が確認できたと判断するのは甘いと考え、書道Ⅱで私は再確認の意味で書体の変遷の古い順に学習することになっています。

3. 書道Ⅱにおける篆書の指導実践

本題の篆書の導入は書道Ⅰで隷書を経験していることから対比させて各自の意見を聞いてスタートします。隷書学習で実力に差がないことを強調し、自分を下手だと決めつけている子を励ますように指導して効果が得られたこともあり、篆書も同様に指導しています。はじめに年表により篆書の成立を説明します。内容をおおまかに説明し、生徒は年表や教科書に目を通しながら必要に応じてはメモをとるようにしています。

具体的な内容は次のようになります。

現存している中国の文字で最も古いものは、殷時代と見られる「甲骨文」である。物事を占ったときに用いた文字で、亀の甲や獣の骨に、錐か刀の先のような鋭いもので彫られている。

殷から周にかけて甲骨文は古銅器に鑄造された「金文」となり、秦には中国最古の学書である「説文解字」に収載された書体「大篆（籀文）」に発達した。「石鼓文」が大篆であり、中国統一に成功した秦の始皇帝が古文を廃止し、大篆をもとにした書体で全国の文字を統一し、「小篆」が発生した。「泰山刻石」が有名である。

このようにして発生した小篆も漢代以降影をひそめた。清代には宋代の金石学の影響で、呉昌碩を始め、篆書を書く人が多く誕生した。呉昌碩が、石鼓文の美しさに心酔し、その臨書に生涯をかけたという有名な逸話も残っている。日本の書道史上にも江戸時代に篆書が登場し、今日に至っている。

生徒はここで、一年時に漠然と知らされていた篆書の知識がより明確になってくるようです。あくまでも高校では、金文から小篆までを総括して「篆書」として学習することを知らせます。

次に篆書の特徴について学習することになっていますが、ここでは各自で考えて発表させることにしています。

まず教科書の篆隸の古典に目を通すよう指示しておき、黒板に「子」の字を篆書体と隸書体で大きく書いておきます。



隸書と比較することによって、はやく特徴をつかむことが出来るのではと思い、篆書の導入では、生徒の発表の場を設け、どんどん意見を聞くことにしています。教科書でしっかり比較したら今度は黒板を見せて、全員に発表させます。一年時で隸書を学習しているので迷わずに発表してくれるから助かります。生徒の発表事項を整理しながら残らず板書しておき、あとで確認します。

発表事項をまとめると次のようになります。

- 共通点
- ・起筆を逆入する（蔵鋒）
 - ・横画が水平
 - ・収筆は軽く止め、そのまま引き上げる

相違点	篆書	隸書
	・形が縦長	・形が扁平
	・線の太さが一定 (棒状になっている)	・波磔がある (線に波勢がある)
	・左右が相称	・波勢にひかれ一部ゆがんでいる
	・楷書でいう転折部にまるみがある	・転折は角ばって二筆になっている
	・文字全体が静止的	・文字全体が動的
	・読めない文字が多い	・ある程度読める

次は実際に書いてみますが、篆書の技法の針金を曲げたような形で、すばやく方向転換する部分が難しいと思われるので、示範します。このときに、私自身はじめて篆書を知り感動した時のことを話したり、生徒の年代に一番近い頃に創った篆刻や刻字の作品を見せるなどしています。そうすることで生徒は篆書体をいつそう身近なものとして受け止めてくれるようです。

授業展開としては、石鼓文から泰山刻石と時代を追いながら進めていきます。石鼓文に関しては、前にも述べました清代の呉昌碩の臨書も、同じ語句を選び書かせています。

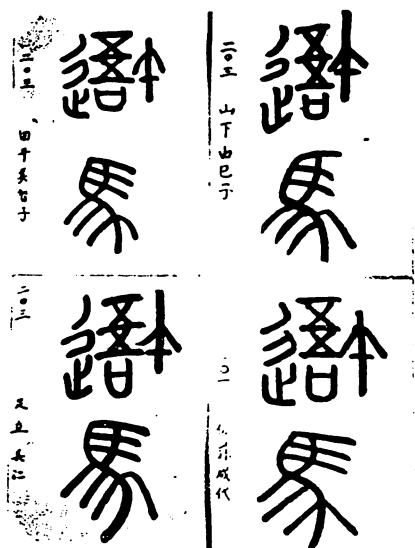
以上のように、時間をかけて篆書を学習することで、次の単元での篆刻がスムーズに

流れてくれることもあり、一学期は篆書、隸書、篆刻、二学期は草書、行書、楷書、三学期は仮名で締めくくっております。

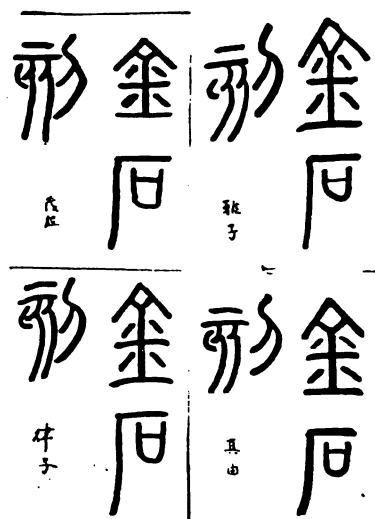
4. おわりに

古典の臨書の意義は、作者の見た美を自分の中に創造することにあると思います。篆書を学ぶことにより、古代人の造形感覚や素朴な人間性に触れ、豊かな心を養い、そこから感動を伴って筆意の書が生まれるように、生徒と共に歩んで行きたいと思っております。

最後に生徒の作品を掲載して終わりと致します。



<石鼓文の臨書>



<泰山刻石の臨書>

書道 I における「蘭亭序」の具体的指導法

小松市立女子高等学校 教諭 東野 洋子

1. はじめに

高等学校に入学して、生徒は、芸術科書道 I の授業に初めて接する事となる。

本校の芸術科目は、美術・音楽・書道の中から一科目を選択するが、その際、生徒達の意識の中に、「書道」がどのように受け入れられているのであろうか。

美術・音楽に関しては、小・中学校の授業の中で、ごく自然に一つの教科として受け止められ、鑑賞・理論を含めた学習がなされていたと思われるが、書道に関しては、「書写」＝「字を書く」実技面である事から、高校入学の際の意識の面に違いが生じてくるのではないだろうかと思われる。しかし、この事は、小・中学校の授業を受け持った事のない私が、安易に述べる事ではないと思うのだが、実際に、「お習字の授業」として選択してきた生徒が、教科書の内容と、それまでのお手本の書との余りの違いに、違和感を示しているのを見ると、そのように思えてくるのだ。

また、特に最近の本校の実情として、「筆で書くこと」の基本ができていない生徒が 3 割近く占めているように思える事だ。

その点に関して、校内での研究授業の結果から、それをまとめたものの一部を転載して示したいと思う。

芸術科書道 I 学習指導案

(一) 単元名 楷書の学習 —— 臨書 ——

(教科書 大阪書籍「高校書道 I」)

(二) 単元の目標 古典の臨書 九成宮醜泉銘

楷書の基礎的学習および臨書の学習

(三) 指導計画 三時間完了の二時間目 (<注>1年1学期前半)

(四) 学習活動 (1) 本時の学習の確認 ○前時では、手本に忠実に書くことを言い、各自・清書の上、提出済みである。

<注>こちらのねらいとして、特に手本について説明を加えず、書かせてみた上で、どの程度、手本を把握し、筆で表現できるかを試してみる事とした。

(2) 臨書に関する復習 ○臨書及び拓本で古典を学ぶ意義について ○上記の事を確認の上、集字による臨書の手本での学習。

<注>結果的には、教科書の著者による臨書作品を手本とする事になるのだが・・・。

(3) 九成宮醴泉銘と欧陽詢に関する学習

<注>教科書に書かれている事を読む程度のもの。

(4) 試書

<注>前時間よりも多少なりとも手本の見方が変わることを期待している。

(5) 学習の要点の設定 ○欧陽詢の書の美しさについて気付かせる

<注>前時に提出された清書を黒板に貼り、参考としながら、各自、自己採点しながら進歩の度合を見る。

(五) 結果

○形から真似る



シ
圭
月
白
水

一般的なさんずい扁として評価

→31名全員大体真似ている。

”首長し”と説明している。

→31名中12名真似ている。

”風通しよく”と説明している。

→31名中28名真似ている。

背勢の書は、書きやすいようである。

→31名全員真似ている。

筆遣いが不十分なため、

→31名中20名が不十分である。

○用筆の面から

圭
月
水

	よい	ややよい	不十分
圭	4名	4名	23名
月	3名	7名	21名
水	7名	3名	21名

(六) 学習からの反省

○1学期前半の学習において、生徒に大きく個人差がある。それは、技術面ばかりではなく、書道に対する興味の示し方にもある。

○興味を示している生徒の中でも、中学校の書写から、古典を中心とする学習に違和感を感じずる者もいる。

○「形から真似る」

一応、教科書を見て、表現することができる。

○「用筆面から」

確実な生徒は5名以下であろうか。ややよいと評価できる生徒は10名前後で、逆に10名弱・1/3の生徒は、筆で書くことに慣れていないといえるようだ。

○このクラスの1/3の生徒は、「筆の持ち方・姿勢・机上での用具の配置」等を注意しなければならない。

最近、特に本校で見られる傾向で、硬筆と同じ感覚で斜め45度の角度で筆の下の方を持って書いている。

○「外国人並みの感覚」を持ち、多様なレタリングの文字やワープロ・活字文字が氾濫する中にある生徒にどのように興味を持たせ、授業を展開していくかが、今後の課題となるようだ。

以上が、本校の実情である。

しかし、それに反して、教科書の内容がより高度に豊富になっているのではないかと感じられる。

個人差と興味の示し方の違う生徒達が書道を選択し、2単位の中でいかに気持ちを集中させるかが、大変難しい事である。こちらの側（教師）が迷い悩む中で、次の段階の「行書の学習」が始まる事となる。

今回の研究課題である、『書道Ⅰにおける蘭亭序の具体的指導法』は、このような実情の中で、如何に、「蘭亭序」に興味を持って学習を進めていくかが問題点となる。

2. 書道Ⅰにおける「蘭亭序」の学習とは

(1) 「書写」から「芸術科書道」へ

高等学校での書道の学習について、その項を教科書より転載すると、

『中学校までの書写学習では、文字を正しく整えて、速く美しく書けるようになることが学習の目標でした。高等学校の書道では、これまでに学んだ書写学習をもとに、芸術として、より美的内容を中心に学習していきます。

文字は人間が創り出した記号です。漢字や仮名は、書写の用具として毛筆が使用されてきたことにより、記号としての機能性を踏まえながら、形や点画に美的工夫がなされ、さまざまな表現が生まれてきました。過去の書跡を観ても、時代や環境・筆者の人間性などの違いにより独自の味わいがあります。

これらの学習は、整った美しさだけでなく、さまざまな美しさを追求・体験し自分自身の眼で美的なとらえ方ができるようにしていくことを目標とします。書の鑑賞と表現の学習は、自己を見つめるとともに、みずからを高め、豊かにすることにあります。』（改訂高校書道Ⅰ 大阪書籍）

以上の事から要約すると、

○芸術として、より美的内容を中心に学習

- 書写の用具として、毛筆が使用されてきた事により、記号としての機能性を踏まえながら、形や点画に美的工夫がなされ、さまざまな表現が生まれた事。
- 過去の書跡から、時代や環境、筆者の人間性などの違いや独自の味わいを知る事。
- 整った美しさだけでなく、さまざまな美しさを追求・体験し、自分自身の眼で美的なとらえ方ができるように、また、自分の思いにかなった表現ができるようにする事。

(2) 行書学習の中での「蘭亭序」の役割

学習を進めていく中で、「蘭亭序」が中心的役割を持っているのではないかと気が付き始めた。それが各教科書の内容を検討するきっかけとなった。

ア. 参考資料 [A]

資料①～⑧ 8種類の教科書の内容 (平成元年度版)

(イ)は「蘭亭序」の取り扱いを示している。

それによると、「蘭亭序」全文掲載の教科書は、

④改訂版書道芸術 I (中教出版)

⑤書法 I 三訂版 (角川書店)

⑦書道 I (東京書籍)

の三種類もある事が解る。

その他の教科書に於ても、⑥以外は上記3種類と同じく、「蘭亭序」を重要な学習の位置付けとして扱われている事が解る。

(ロ)は行書の学習内容である。

それによると、王羲之の書を経て、「風信帖」空海の書、日本の書への影響として関連させている。

(ハ)は、楷書の学習の内容である。

楷書を学習してから行書の学習へと進むパターンの中で、唐時代の書を東晋・王羲之の書との関連の中でとらえているように思える。

イ. 参考資料 [B]

資料①・②・⑤・⑥・⑧は平成三年度版、教科書の内容。

平成元年度と比較する。一部変更または取り扱いが大きくなっているものもある。

(3) 教科書の内容を検討して

資料⑧ 高校書道 I 大阪書籍 平成三年度版

内容 (一)

『茂林』(張金界奴本) 二文字の臨書学習

内容 (二)

『有崇山～幽情』49文字

(解説)

永和九年(353)、王羲之が会稽山陰(浙江省)の蘭亭に名士を集めて、禊みそぎ

を行い、流觴曲水の宴を催しました。その時に詠まれた詩を集め、みづから序文を書いたのが蘭亭序です。興に乗ってこれを書き、後日何度も書き直しましたが、これに勝るものができなかつたということです。

以来、今日まで行書学習の古典として尊重されています。

内容 (三)

『天朗氣清』(神龍半印本) 四文字臨書学習

内容 (四)

『是日也～俯仰』47文字

(解説)

蘭亭序は、遂に唐の太宗皇帝の得るところとなりました。太宗は、欧陽詢・虞世南・褚遂良らに臨書させたり、この神龍半印本のように、優れた技術を持つ者に敷き写しをさせたりしました。太宗は死に臨んで、これを愛するあまり副葬する事を強く望んだので、今日伝わるものは、すべて臨模(見写し)か撮模(透き写し)されたものです。

内容 (五) (蘭亭序学習の後)

鑑賞『祭姪稿』 顔真卿

(解説)

祭姪稿は、乾元元年(758)、顔真卿が50歳の時、安祿山・史思明の乱で殺された姪の季明を祭るために書いた祭文の草稿です。改まった感じやてらいのようなものがなく、ほとぼしる心情をぐいぐいと抑揚豊かに書き進めています。

内容 (六)

鑑賞『風信帖』 空海

(解説)

風信帖は空海が最澄にあてた尺牘の一つで39歳ごろの書です。

空海の風信帖は、王羲之を根底として、厳しさとやさしさ、沈着と輕妙さを、うまく調和させています。率意の書と思われる風信帖には、とくによくそれが表れています。

内容 (七)

鑑賞『虹縣詩卷』 米芾

(解説)

虹縣詩卷は、米芾が虹縣を旅した時のものです。

彼は晋代の書をことのほか敬愛し、多く所蔵し、かつ深く学んだ人です。(以下略。)

(4) 結論として

(3)で行書の学習を教科書の内容でみたが、蘭亭序の「興に乗ってこれを書き、後日書き直したが、これに勝るものができなかつた。」とする「率意の書」の精神が、「祭姪稿」・「風信帖」・「虹縣詩卷」へと結びついているように思える。

つまり、行書の学習において、「行書をどのようにとらえるか」であるかと思える。「行書は日常生活に最も多く使われている書体」とは、「率意の書」であり「尺牘の書」という事になろうか。

それはまた、行書を「楷書が行われる以前に、行書が隷書の省略体として用いられていた書体」としてとらえるか、一般的に權・行・草と配列される中で「筆を自由に使いこなし、美しい字を書くための手本の書」として考えるにあるかと思われる。

しかし、「蘭亭序」「風信帖」を学ぶことは、「手本としての行書」の考えでは、学び切れないものがあるように思えてくる。現実に生徒が疑問として発する質問の中に「どうしてこのように細い線になったり、大小様々の字が並ぶのか」は、率意の書・尺牘の書を「どのように理解させるか」になるかと思う。

つまり、理解させるには、先に述べた、芸術科書道の学習課題である「過去の書跡から、時代や環境、筆者の人間性などの違いや独自の味わいを知ること。」の学習が必要となる。

悩みながら教科書をながめているうちに、「蘭亭序」の文字から、あるいは、教科書に書かれている解説の文から、何かが湧き出て来るのを感じた。

「蘭亭序」の中に出て来る登場人物は、王羲之の書を中心として、太宗皇帝と、唐時代の能書家達である。私が教科書をながめながら思い悩むとそれ以上に、その当時の人々の「深い溜息」も聞こえて来るようだ。

書を学ぶ事は、本当に「過去の書跡から、時代や環境・筆者の人間性」を学ぶ事であると知らされるのである。

それが、授業の中で果たして、生徒に理解させる事ができたか疑問であるが、自分自身がそのことに気が付いた事だけでも一つの成果と言えるようだ。

3. 「蘭亭序」の学習から、小説への展開

以上の学習の過程から、東晋時代から唐までの長い歴史を追ううちに、その歴史の中に登場する人々の心を小説というフィクションの中で、私自身の自由な発想が生まれ、枚数360枚、ミステリー小説として書き上げてみた。

私が強く興味を抱いた点は、『・・・(王羲之が)興に乗ってこれを書き、後日、何度も書き直しましたが、これに勝るものが出来なかったということです。以来、今日まで行書学習の古典として尊重されています。』

『「蘭亭序」は、後の太宗皇帝の得るところとなりました。太宗は、欧陽詢・虞世南・遂良らに臨書させたり、この神龍半印本のように、優れた技術を持つ者に敷き写しをさせたりしました。太宗は死に臨んで、これを愛するあまり、副葬する事を強く望んだので、今日に伝わるものは、すべて臨模(見写し)か搨模(透き写し)されたものです。』であり、つまり、『率意の書』と太宗の命で臨書する欧陽詢・虞世南・褚遂良や、他の大勢の搨書人達の『書く事とは何かの心の部分』の二点である。

「ある印人のこと」と題した篠田桃紅の文章(日本教育書道連盟発行「教育書道」・1989年1月号)の中の、河井荃蘆の逸話から、『河井宅は当時、靖国神社の近くで、

空襲の受けた時いったんは、夫人が止めるのも振り切って自宅に戻り、再度の空襲に会い、その人は、愛蔵のものと運命をともにしてしまった。——書物や甲骨は生き物でないだけに傍に居なければならぬ——の思いで・・・』と、書人の激しい情勢が感じられ、ミステリー小説の題材として、無断拝借させてもらった。

小説の中では、陳東坡（蘇東坡の名から）の父が、師・芥塵（かいじん・大書人の名としてまずかったが）の書を学び、臨書し修業する中で、師以上の実力となり、それにつれ、芥塵の精神状態が不安定となり、異常状態から、遂には、書の書けない大書人として設定した。

芥塵の妻は、木偶の坊と化した夫に愛想が尽き、世間に狂人・芥塵が知れ渡る前に、名声だけを残して、夫とその弟子をこの世から葬る事を企てる。

つまり、大書人の最後は、「書や蔵書と共に死んだ。」という、先の逸話の荃蘆の惜しまれる死である。

陳東坡が父の無念の死が、芥塵の妻の巧妙な策略である事を知り、この世に名を残す事の出来なかった父の書人としての姿を、

「コピーだよ。——コピーの機械だよ。」

と吐き捨てるように言わせた。

「コピーの機械だ。・・・良いコピー、悪いコピー。——それは機械の性能を言うに過ぎぬ。」

これに対し、古典の話に及んだ中で、逆に陳は質問を発して、

「初唐の三大家と呼ばれるこれらの書家の事をどう思う。」

相手は、

「立派な書家だろう。」と答える。

更に陳は問いかける。

「その頃、書を書く事をどう思う。」

問答の末、相手は、

「（初唐の三大家たちは）作品として書いたものか、記録として書いたものか・・・お前（陳）の話の聞いていると解らなくなるな。」と、陳のコピー論へと引きずり込まれていくが、

「しかし、初唐の三大家たちの書にはそれぞれ個性がある。個性があるから、今日まで古典として残っているんだろう。」と、精一杯の反論をする。

「個性と言うけどね、当り前の事だろう。——人間一人一人違う事に、どうして個性という言葉をやややくしく付けるんだ。——（浮浪者のような生活を送る）俺は個性か！」と叫ぶ。

これらの問答から、陳の思いは、

『甲骨文字は、紙の無い時代、「書きたい！記録したい！」の欲求の中で、甲羅や獣骨に刻したのだ。それ程までして、「人間は記録することを求めた。」のだ。「書き残さねばならなかった。」のだ。』

そして陳が言う、「記録は嫌いだ。」は、

『文字が発達し、紙も筆記用具も開発され、「自由に書ける。」ようになると、「美化」する時代に入ったのだ。それは、人間の持つ素晴らしい能力に違いないのだが、「

より美しく」そして、「より個性を求めて」人々は競い合う事となる。』

そこに、

「嘘がある。」と言い、また「嘘も入ることを恐れる。」と言うのだ。

小説には、ミステリー小説として、どろどろした部分と、意表をつく部分が欲しい。

そこで、

陳の無念は、実のところ、芥塵の妻の焼殺事件ばかりではなく、その事以上に陳を苦しめたものは、「芥塵の妻の書」であるとした。

大書人芥塵の事を美化し、後世に書き残す事により、書や蔵書と共に殉じた芥塵の書をより高く評価せんが為のもう一つの策略を知った事による。

「空襲の中、燃え落ちる家の中へ・・・書や蔵書を見捨てる訳にはいかぬと・・・」と切々と未亡人として美しい女性の筆跡でその顛末を書き残す。

後にその「記録された書」を見た陳は驚愕する。幼い頃、書のため師のため妻子を捨て出奔してしまった父ではあるが、母から見せられていた父の書の香りだけは忘れてはいなかった。

父は、この顛末をすでに、生前、自分の死の姿も含めて書いていたのだ。

大書人・芥塵の名を残すため、書や蔵書と共に殉じたという演出のため、命を賭けた父の哀れな最期を思うのだ。そして命だけは助けられたものの戸籍の無い死人のその後の人生の見たものは、未亡人の為に無造作に売り払われる自分が書いた芥塵の書であるのだ。

陳が論議の中で、

『書に嘘がある。』と言う。しかし、この逆転した考えは、実のところ、

『書は真実であり、その人の個性を表す。』事に通ずるのだが・・・。

このように、ミステリー小説は、私の自由な発想を自由に表現する事により、一層の広がりを持たせてくれる。

書道の教師として、教室で一年生を相手に話せる内容ではないが、蘭亭序の授業を続けながら、この小説を書き進めていると、歴史の中に登場する人物が自由に言葉を発してくれるのだ。

私自身、妙な気持ちになってくる。そして、

『その当時の書人たちは、書く事に苦悩していたのではないか』と思えてくるのだ。

4. おわりに

「芸術科書道」として、私が難しいと感ずるのは、生徒と同様に行書の臨書である。

「蘭亭序」や「風信帖」を、いかに学習するかに、その難しさがある。また、これらは、書道史の中で大きく比重を占めている。

とくに「蘭亭序」は、作品と共に、「王羲之」という大人物が、その後の書道の歴史の中で、大きく影響を及ぼしている事だ。それが、様々な逸話から、更に広がりを見せて、際限なく問題を提示して来るからだ。

教科書8種類を調べるきっかけはここにあった。

各教科書の中で、果たしてどの程度取り上げられているものかの思いの中からであっ

だが、予想通り、またはそれ以上の比重として感じられた。

私が使用した「改訂 高校書道Ⅰ・大阪書籍」は、8種の中で、中の上の割合いで蘭亭序を取り上げているが、学習を進める中で、「もう少し」の不満を抱かせた。

それは、蘭亭序が全文掲載されていない事に拠るようだ。

8種中、3種の教科書が全文掲載であり、教科書全体の流れの中で、ごく当然のように扱われている。この点は、大変意義深いものであると思われる。

その意味で、「蘭亭序」を学習教材として取り上げるならば、中途半端ではなく、時間をかけ、全文を鑑賞出来るようにし、全臨に取り組む事が出来るようにすべきだと思われる。

「蘭亭序」に取り組み、努力する中で、生徒達は緊張感と充実感とを味わう事になれば、「芸術科書道」として、歴史の深さと重さを知る事になるであろう。

しかし、現実には、私自身の力不足と試行錯誤の途中でもあり、まだ実現には至っていない。

以上、日々の授業の現実と今後の展望として述べてみました。

参 考 資 料 [A] (平成3年度版)

各教科書より

「蘭亭序」を中心にみる

(イ) 「蘭亭序」の取り扱い

(ロ) 行書の学習の内容

(ハ) 楷書の学習の内容

① 最新 書道Ⅰ 改訂版 金子隼亭 教育出版			
(イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・張金界奴本 (是日～聴之) 36字 やや縮小 ・[王羲之、唐の太宗についての解説はごく簡単な扱い] 		
(ロ)	<ul style="list-style-type: none"> ・集王聖教序 王羲之 ・晋祠銘 太宗 	<ul style="list-style-type: none"> ・風信帖 空海 ・枯樹賦 褚遂良 	
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・九成宮禮泉銘 歐陽詢 ・孔子廟堂碑 虞世南 	<ul style="list-style-type: none"> ・鄭羲下碑 北魏時代 ・高貞碑 北魏時代 	

② 書道Ⅰ 青山杉雨 光村図書			
(イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・張金界奴本 (湍暎～之盛) 58字 やや縮小 ・[集王聖教序で行書の基本練習 蘭亭序について特に説明なし] 		
(ロ)	<ul style="list-style-type: none"> ・争坐位稿 顔真卿 ・枯樹賦 褚遂良 	<ul style="list-style-type: none"> ・伊都内親王願文 橘逸勢 	
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・孔子廟堂碑 虞世南 ・孟法師碑 褚遂良 	<ul style="list-style-type: none"> ・麻姑仙壇記 顔真卿 	

③ 書Ⅰ 上條信山 教育図書	
(イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・張金界奴本 (湍暎~暢仰) 47字 やや縮小 ・[蘭亭序について、唐の太宗、摹書及び初唐の三大家について説明あり]
(ロ)	<ul style="list-style-type: none"> ・集王聖教序 王羲之 ・争坐位稿 顔真卿 ・風信帖 空海 ・李嶠詩殘簡 伝嵯峨天皇
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・九成宮禮泉銘で楷書の基本練習 ・雁塔聖教序 褚遂良 ・九成宮禮泉銘 欧陽詢 ・建中帖 顔真卿

④ 改訂新版 書道芸術Ⅰ 春名好重 中教出版	
(イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・神龍半印本により全文、原寸で掲載 ・[蘭亭序による表現の学習と鑑賞として、王羲之について、唐の太宗、模書について説明あり]
(ロ)	<ul style="list-style-type: none"> ・哀冊 褚遂良 ・争坐位稿 顔真卿
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・孔子廟堂碑 虞世南 ・建中告身帖 顔真卿 ・牛欄造像記 北魏時代(唐の楷書と趣の違いを学習) ・論經書詩 鄭道昭(北魏の牛欄造像記との書風の違いを学習、方筆と円筆) ・九成宮禮泉銘 欧陽詢

⑤ 書法Ⅰ 三訂版 伏見冲敬 村上翠亭 角川書店	
(イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・神龍半印本(原寸で全文掲載) ・[蘭亭序の解説あり、また字説については詳しく解説あり]
(ロ)	<ul style="list-style-type: none"> ・集王聖教序 王羲之 ・風信帖 空海 ・姨母帖 王羲之 ・喪乱帖 王羲之 ・温泉銘 唐の太宗
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・蘇孝慈墓誌銘 隋時代 ・温彦博碑 顔真卿 ・{鑑賞として、牛欄造像記 北魏、元羽墓誌銘 北魏、張猛龍碑 北魏、雁塔聖教序 褚遂良 掲載} ・孔子廟堂碑 虞世南 ・多宝塔碑 顔真卿

⑥ 現代書道 I 石橋犀水 修文館出版	
(イ)	・蘭亭序 24字 参考作品として掲載のみ
(ロ)	・集王聖教序 蘭亭序 晉祠銘 行書千字文 元の趙孟頫、二字集字で学習
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・孔子廟堂碑 虞世南 ・牛欄造像記 ・鄭羲下碑 ・{二字集字により、幅広い臨書学習で、特に蘭亭序の臨書としての扱いはない} <ul style="list-style-type: none"> ・九成宮禮泉銘 欧陽詢 ・建中告身帖 顔真卿 ・孟法師碑 褚遂良より集字

⑦ 書道 I 飯島春敬 松井如流 東京書籍	
(イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・張金界奴本 全文やや縮小 ・神龍半印本(永和～弦之)71字 ・[流觴曲水の宴、唐の太宗、臨模、初唐の三大家のことなど解説あり]
(ロ)	<ul style="list-style-type: none"> ・風信帖 空海 ・温泉銘 太宗 ・枯樹賦 褚遂良 ・争坐位稿 顔真卿 ・屏風土代 小野道風
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・孔子廟堂碑 虞世南 ・孟法師碑 褚遂良 ・[初唐の三大家を中心に解説あり] ・九成宮禮泉銘 欧陽詢

⑧ 改訂 高校書道 I 村上三島 杉岡華邨 大阪書籍	
(イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・張金界奴本(有崇山～弦之)37字 ・神龍半印本(盛一～聴之)47字
(ロ)	<ul style="list-style-type: none"> ・祭姪稿 顔真卿 ・風信帖 空海 ・[唐の太宗について、初唐の三大家、臨模、搨模について解説あり]
(ハ)	<ul style="list-style-type: none"> ・九成宮禮泉銘 欧陽詢 ・孔子廟堂碑 虞世南 ・[初唐の三大家の書について、王羲之の書の伝統の上に開花したものと解説] ・顔氏家廟碑 顔真卿 ・牛欄造像記 北魏

参 考 資 料 [B] (平成3年度版)

平成3年度版 各教科書より「蘭亭序」を中心に見る。 [] 内、教科書の解説

① 最新 書道 I 改訂版 金子鷗亭 教育出版

・張金界奴本 (是非～聽之) 36文字 やや縮小

↓

・集王聖教序	王羲之集字	[運筆の緩急・強弱、氣脈の貫通]
↓		
・晋祠銘	太宗	[雄大な氣風、すなおな運筆]
↓		
・風信帖	空海	[筆力を込め、厚味のある線]
↓		
・枯樹賦	褚遂良	[運筆に注意、氣脈の貫通]
↓		
・創作	[行書は運筆が自由で、書き手の気持ちの動きを表現しやすいので、作品制作に使われることが多い。]	

② 書道 I 青山杉雨 光村図書

・八注第一本 (列坐～聽之) 58文字 縮小

天朗氣清 (張金界奴本) [集王聖教序で行書の基本練習]
[蘭亭序の起筆に変化の多い用筆と氣脈の貫通に注意]

[注] 平成元年度、提示が張金界奴本で、「天朗氣清」の四文字は八注第二本であった。
(平成2年度に改訂)

↓

・争坐位稿	顔真卿	[文字の大小や筆圧の強弱と字形の向勢]
↓		
・枯樹賦	褚遂良	[筆圧の強弱・送筆の曲直・文字の形]
↓		
・伊都内親王願文	橘逸勢	[行書の表現力を養うため、用筆・運筆]
↓		
・創作	[墨の濃淡・潤濁、墨継ぎによる表現の効果の違いを理解し、氣脈の貫通に注意して制作しよう]	

⑤ 書法 I 四訂版 伏見冲敬 村上翠亭 角川書店

・神龍半印本 (原寸・全文掲載)



・鑑賞として

姨母帖	王羲之	温泉銘	太宗
喪乱帖	" (搨模本)	風信帖	空海
集王聖教序	" (唐時代刻石)	蜀素帖	米芾

⑥ 現代書道 I 改訂版 石橋犀水・修文館出版

・蘭亭序 24文字 (参考図書として掲載)



- 行書の基本一〔行書の特徴〕
- 行書の基本二〔書の性情〕
- 行書の基本三〔行書の書風〕
- 行書の基本四〔字形のとり方〕
- 行書の基本五〔古典の学習〕

一字・二字集字により行書の基本学習
集王聖教序、枯樹賦、蘭亭序等から



創作〔線の太細 墨量と墨色〕



創作〔毛筆の種類と表現効果〕

⑧ 高校書道 I 村上三島 杉岡華邨 大阪書籍

・張金界奴本 (有崇山～幽情) 49文字

・神龍半印本 (是日也～俯仰) 47文字



祭姪稿 顔真卿



風信帖 空海



虹縣詩卷 米芾

『書譜』に学ぶ芸術科書道の 臨書法と創作法について

金沢大学大学院教育学研究科 松井 瑞代

1. はじめに

今年の四月から非常勤講師として教壇に立つことになり、今までの自分の学書態度の甘さをつくづく痛感している。というのも明確な学書理論をもっていさえすれば、それに基づいて授業を行うことは容易なのだが、私自身、何年か書を学んでいながらそれについて真剣に考えることがなかったのである。しかし、いざ教える側に立つと、あいまいさをもって理解していることというのはあいまいにしか教えられないものである。私が特に悩んだのは臨書と創作をどのように取り入れていくかである。考え方は三つあるかと思う。一つ目には臨書中心主義、二つ目には創作中心主義、三つ目には臨書をふまえてから創作を行うこと。この三つのうち一番採用されやすい授業内容は三つ目の臨書をふまえてから創作を行うことであろうかと思う。しかしこれが一番難しいことなのではないだろうか。私自身、臨書を行っていながらなかなか創作に結びつかないという現状だ。生徒はどちらかというところ創作を好む。創作こそ自分をアピールできる唯一の場であるし、自分の生み出した作品には朱を入れられることもないからだ。しかしそれがある種の美を含んでいないのではやはり、芸術科書道の存在も無意味であろう。美といっても様々である。優雅な美もあれば、枯れた美もある。苦難にうちひしがれたような美もある。そのような美はどのようにして表現することができるのか。このように臨書と創作を一つにするすべのない私に一点の灯りをともしてくれたのが「書譜」であった。「書譜」は私にまず臨書とは何かを、そしてそれが確かに創作への一番の近道となること、さらに創作の美は生み出すものではなく生み出されることを教えてくれた。そこで今回、拙いながらも「書譜」に学ぶ臨書法と創作法を紹介したいと思う。「書譜」は唐の孫過庭が垂拱三年（687）に著したもので自らも、

『庶はくは一家の後進をして、奉ずるに規模を以てし、四海の知音をして、或は観省を存せしめんことを。緘秘の旨は、余、取るなし。』

と記すとおり、書の後継者に実践と経験からなる孫過庭独自の書論を伝えるがために著されたようである。

2. 臨書について

(1) 臨書の必要性について

まず、孫過庭がどのように臨書の必要性について説いているかを見てみたいと思う。

『況んやその点画を積まば、乃ちその字を成すと云ひて會ち傍ら尺楨を窺ひ、俯して習ふこと寸陰をもせず、班超を引きて以て辞となし、項籍を援きてみづから満てりとし、筆に任せて体をなし、墨を聚めて形を成し、心は擬効の方に昏く、手は揮運の理に迷ふをや。その妍妙ならんことを求むるも、また謬ちならずや。』

『異を好み奇を尚ぶの士は体勢の多方を翫び、微を窮め妙を測るの夫は推移の奥蹟を得んとす。』

これらの意見は、臨書の過程を踏まえずに自運で書くことの危険性を説いている。臨書を怠ることは豊かな表現の可能性をはばみ、俗書に溺れやすい。それは構成を奇異にすることばかりにとらわれて、「推移の奥蹟」つまり、運筆の緩急抑揚などの基本的書法の原理が身につけていないからであると説く。このことは、私の最初の疑問、「臨書とは何か」のよき解答となりうるであろうと思われる。

『学は一家を宗とすと雖も、而も変じて多体を成す。その性欲に随ひて、便ち以て姿をなさざるなし。質直なる者は、則ち倥傯にして適ならず。剛佞なる者は、また擯強にして潤なし。矜斂なる者は拘束に弊れ、脱易なる者は、規矩に失なひ、溫柔なる者は軟緩に傷はれ、躁勇なる者は剽迫に過ぎ、狐疑なる者は滯淡に溺れ、遲重なる者は蹇鈍に終り、輕瑣なる者は俗吏に染む。斯れみな独行の士の、偏翫の乖くところなり。』

と、同じ臨書をして、生得の個我にとらわれやすいため、一面的なものしか表現されない難を説き、精密に虚心に臨書することを心掛けるよう説いている。ここにおいても個性を陶冶し、心技ともに調和のとれた境地に至りえる臨書の必要性を知ることができるのである。

(2) 臨書教材について

孫過庭は王羲之の書を第一としている。それは、

『その專擅を考うるに、未だ前規に果らずと雖も、擴りて以て兼ね通ず。故に即事に慙づることなし。』

『彼の二美なる、而も逸少はこれを兼ね。草に擬すれば則ち真を余し、真に比すれば則ち草に長ず。専工は小しく劣ると雖も、而も博渉は多く優る。』

と、あるように、「兼ね通ず」、「博渉」であるからである。王羲之は真書、草書という専門の書体では鍾繇、張芝に及ばなかったが、各書体をひろくこなしている点でははるかに二人より優れていた。それで日常文書をしたためてもひやりとすることはなかったという。ここで私達が学べることは教材は書体も書風も多種に渡った方が、後の創作において表現を豊かにできるということである。このことは、

『博く始終の理を究め、虫篆を溶鑄し、草隸を陶均せよ。五材の並び用ふるを体せ

ば、儀形は極らず、八音の迭ひに起るに象らば、感会は方なからん。』
 からも伺われる。つまり、各種、各体（篆・隸・楷・行・草）をあわせ用いることを
 体得すれば、変化ある種々のかたちが生まれ八音がこもごもかなでられて新しいハー
 モニーがかたちづくられるようなもので、種々の書風や筆意を融合させえたらばそ
 れこそその書は無際興を呼び起こすことができるのである。学校教育では
 限られた時間であるので、それほど多くのは教材として扱えないとしてもやはり
 一つでも多くを教授できるよう努力することは必要であろう。しかし、ここで
 重要なのは「理を究め」ることである。書風、書体ごとにその書法の原理を分析して
 分かりやすく教授してあげることが教師の役目となる。このことについては次に詳しく
 挙げる。

(3) 書法の原理について

書法の原理について孫過庭は次のように言う。

『今、執・使・用・転の由を撰し、以て未だ悟らざるものを祛かん。執とは深淺を
 謂ふ、長短の類これなり。使とは從横を謂ふ、牽掣の類これなり。転とは鉤趯を
 謂ふ、盤紆の類これなり。用とは点画を謂う、向背の類これなり。』

まず「執」とは執筆を指し、その深淺を意味するという。言い換えれば、書体や字の
 大小の差によって執筆を長短にするたぐいをさす。使とは縦画、横画を運筆する呼吸
 をいう。引いたり曳いたりする運筆のたぐいである。転とは、まがりくねりをさす。
 盤紆、つまり宛転たる運筆のたぐいである。用とは一点一画の力の均衡を意味する。
 換言すれば結構法のいわゆる向勢・背勢の類をさすのである。これらの基本的技法を
 臨書の際、教材とする作品の中から教師が見出し、書法原理として身につけさせな
 ければ、新たな創作は生まれにくいことを暗示しているように思われる。孫過庭は
 この基本的技法、原理の追究についてことあるごとに触れている。

『必ず能く傍く点画の情に通じ…』

『初め分布を学ぶが如きに至っては、ただ平正を求むるのみ。』

『これを察する者は精ならんことを尚び、これを擬する者は似んことを貴ぶ。況ん
 や擬して似しむる能はず、察して精ならしむこと能はず、分布は猶ほ疎にして、
 形骸も未だ検せざるをや。』

このように孫過庭は臨書の態度としてとにかく点画を精密に観察し、筆蹟の全貌を忠
 実に似せることを重点的に説いている。しかし、精密に虚心に臨書を行い、各書風、
 書体の基本的書法を修得した後は無為でいても法にかなった、つまりある種の美を備
 えた書に取り組むことができると説いている。

3. 臨書から創作へ

『夫れ運用の方は己れより出づと雖も、規模まことの設くるところは、信・47に目前まごに属す。これを一彙いに差さへば、これを千里に失いなふ。苟もその術じゆつを知らば、適あに兼あね通とずべし。心は精せいを厭いとはず、手は熟じゆくするを忘れず。もし運用は精熟せいじゆくを尽し、規矩きこは胸襟きよに闌こんずれば、自然じぜんに容よう与よ徘徊はいし、意いは先まんじ、筆ひつは後ごに、蕭灑せうさい流落りゅうらくして翰こは逸いし神しんは飛とせん。また猶なほほ弘羊こうようの心は、無際むがいに預より、庖丁ほうていの目は、全牛ぜんぎゅうを見ざるがごとくならん。』

この孫過庭の言葉は臨書の存在が必然的に創作をも意味していることを示すものと思われる。修得し、蓄積された基本的書法が豊富であればあるほどそれらが融合された世界、創作における独自の表現内容も豊かで深いものになるということであろうか。ここでいう創作はもはや倣書びやうのたぐいではなく、純粹創作である。純粹創作では、「魚を得、兔を獲て、猶ほ筌蹄しゆんていを悵あむむこともなく、また書の内容に関わらず、「楽しみに涉れば方に咲ひ、哀しみを言え己に歎なげずる」といった感情のおもむくままに筆を走らせたものである。そのためにもやはり日頃のたゆまぬ臨書学習が必須であり、各書風・書体に触れる機会を多くするためにも創作は学年の最終課題にもつてきて一年の総まとめとしたものである。

4. おわりに

以上、孫過庭の「書譜」から臨書と創作について学んできたわけであるが、芸術科書道の時間数からいってもかなりハードな内容となるかもしれない。しかし、これらのことが理想的であると信ずるのであれば、あとは生徒と共に理想に向かって前進するのみであろう。最後に教師として自戒の意味をこめて、「書譜」のこの言葉を肝に銘じたい。

『夫れ家いに南威・53の容ありて、乃ち淑媛しゆゑんを論ろんずべく、龍泉・54の利ありて然る後に断割・55を議ぎすと聞く。語、その分に過ぐれば、実に、枢機しゆきを累かさはさん。』

<注> * 1 「奉ずるに規模を以てし」…つつしんでこの準則をうけよの意。2 「知音」…もと楽律を正しく理解する意。3 「観省」…観察・省察の意。4 「緘秘の旨」…秘密にして人に語らないこと。5 「寸陰」…わずかな時間。6 「班超」…AD33～112。後漢の人。あざなは仲升、扶風安陽の出身。家が貧しいため役所で筆耕をしながら母を養っていた。あるとき仕事をやめ筆を投げ、「大丈夫たるものは異域に戦功をたて、封侯をかちとるべきだ。こんな仕事は続けていられない」といった。同僚はせせら笑ったが「つまらん奴ばらに壮士の志がわかるものか」とうそぶいた。その後、景帝のときに西域に出征し、戦功によって定遠侯に封ぜられた(『後漢書』巻77本伝)、という故事による。7 「項籍」…BC232～202。あざ

なは羽、下相の出身。秦末に楚の国より起こって霸王となったが、垓下の戦で漢の劉邦に敗れ自殺。『史記』項羽本紀に「項籍は少年の頃、学業もものにならず武芸もまた上達しなかった。おじがそれをなじったら、項籍はいった。書は姓名を書けさえすれば十分だ。剣は一人の敵を相手にするだけのものだ。学ぶに足りん。万人を敵する術を学びたい。そこでおじが兵法を教えてやると、大いに喜んだ」という故事をさす。8「擬効の方」…手習いの方法をいう。9「揮運の理」…筆運びの道理をいう。10「妍妙」…至妙とか極妙というのに同じ。11「異を好み奇を尚ぶ」…互文で「奇異を好尚する」というのに同じ。12「体勢の多方」…体勢は結体と筆勢。多方は多方面のことをいう。つまり作品構成の変化多端をはかることである。13「微を窮め妙を測る」…互文で「微妙を窮測」というのに同じ。14「推移を奥蹟」…推移は運筆の緩急・抑揚などの変化のうつりかわりをいう。奥蹟は道理の深密なところをいう。15「性欲」…個性の志向というほどの意。16「姿」…姿態・結構。17「質直」…性質の正直なこと。18「徑促」…まっすぐとか率直の意。19「剛佷」…強情。20「掘強」…いかついこと。21「矜斂」…きまじめで感情をこらすこと。22「脱易」…疏略とか軽卒の意。23「溫柔」…温和柔順、がここでは穏やかすぎることを意味する。24「軟緩」…慢緩と同じ。25「躁勇」…せっかちで粗暴なこと。26「剽迫」…剽は劫、迫は急迫の意。27「狐疑」…うたがりぶかいこと。28「蹇鈍」…にぶいこと。29「輕瑣」…つまらぬことにこせこせすること。30「俗吏」…識見のない凡庸な下級役人をさす。31「独行」…独学の意。32「偏翫」…かたよった好み。33「專擅」…もっぱらに・ほしいままにするの意味。すなはち草書なら草書、楷書なら楷書の一体のみの専習をいう。34「前規」…先人の規範。鐘・張のそれをいう。35「即事」…日常の事柄を就すこと。36「慙づる」…ひやりとする。37「彼の二美」…鐘・張の美点。つまり張芝の草書と鐘繇の楷書のそれをさす。38「專工」…鐘・張の専門とする楷と草とをいう。39「博涉」…各体の書に博くゆきわたること。40「始終の理」…運筆における根本の理法をいう。41「溶鑄」…自家薬籠中のものにするをいう。42「陶均」…意は溶鑄と同じ。43「儀形」…形象の意。44「八音」…鐘・磬・埙・鼓・琴瑟・祝歌・笙・管をさし、楽器をいう。ただしここではさまざまな筆意にたとえたものである。45「感会は方なからん」…興趣は無限であるの意。46「分布」…構成配置。47「目前に属す」…自分の眼前にある手本を注視するの意。48「胸襟に闔んずれば」…体得して自然と現れるように覚えこむこと。49「容与徘徊」…ゆつたりと動くこと。50「蕭灑流落」…さらつとしてこだわりのないこと。51「弘羊の心は、無際しに預り」…『漢書』食貨志などにみえる桑弘羊の逸話をふまえる。かれは13歳で皇帝に仕え、のち塩鉄を管理し国庫を富ましめて功があった。経済に明るく将来のことまで預知したことで名がある。52「庖丁の目は全牛

を見ざるがとくならん」…『莊子』養生主篇の寓話による。ここでは書の道を
会得すれば、思いをこらすことなく運筆は自在となることをいうのである。53「
南威」…また南之威といい、『戦国策』魏策にみえる美女の名。54「龍泉」…宝
劍の名。55「断割」…竜淵劍の切れ味という。56「枢機を累はさん」…辱をうけ
ることをいう。

※「書譜」から引用した箇所を書き下し文、注はすべて、西林昭一著『書譜』（
明德出版社）による。その他の注解本は後に参考文献として列記しておく。

<参考文献>

- ・西林昭一著『書譜』昭和四十七年明德出版社刊
- ・平東山『孫子書譜証註』天明丁未（一七八七）刊（『書苑』第二卷三～八影印
所載）
- ・西川寧『書譜釈文』昭和十年旧『書道』巻四、十～十二所載
- ・藤原楚水『袖珍孫過底書譜』昭和十五年三省堂刊。また昭和三十二年清雅堂刊
- ・猪口篤志『書譜註』昭和三十四年謄写私家版
- ・谷村薫斎『書譜』昭和三十四年二玄社（書跡名品叢刊25）刊
- ・田邊古邨『書譜』昭和四十三年日本習字普及協会刊
- ・福永光司『書譜』昭和四十六年朝日新聞社（中国文明選第十四巻『芸術論集』
所収）刊

第2回石川県書写書道教育研究大会経過報告

1987. 1. 23 有志が集い県下に校種一貫した書写書道教育研究組織設立に向けて懇談
(昭和62年) する会を発足させる。(1988. 2. 26迄に9回の会合を開く)

1988. 4. 22 石川県書写書道教育懇談会と改称し第1回の会合を持つ〔金沢大学教育
(昭和63年) 学部書道演習室〕(1990. 9. 7迄に21回開催する。)

1989. 8. 29 石川県書写書道教育連盟設立総会〔ホテル六華苑〕
(平成元年) (平成2年度に第1回石川県書写書道教育研究大会開催することを決定)

平成元年度 石川県書写書道教育連盟役員 一敬称略一

名 譽 顧 問	金子 曾政 (元金沢大学学長)
顧 問	南 和男 (石川県教育長)
相 談 役	北西 正二 坂口 敏 田島 庄吉 久田 久信 水田 茂良 横西 清
会 長	藤 則雄 (金沢大学教育学部長)
副 会 長	三宅 正敏 (県教委) 河本 隆成 (馬場小) 大野 重幸 (金石中)
理 事 長	佐藤 政俊 (金沢女子高) 山田 泰正 (越路小) 法水 光雄 (金沢大)
副 理 事 長	法水 光雄 (金沢大) (兼任)
監 理 事	嘉門 久直 (森本幼) 森川 登夫 (中条小) 谷村 修次 (蓮代寺小)
	松寺 淳照 (森本中) 中山 武久 (津幡高)
	吉田 一郎 (向本折小) 木本 峰生 (七尾市教委)
	県教委学校指導課 永井志津子 高沢 幹夫
	金沢地区 幼・保部 青山 洋子 (みどり・かわい幼稚園)
	小学校部 林 道子 (南小立野小) 中川 晃成 (館野小)
	中学校部 千場 和子 (野田中) 古本 佳世 (野田中)
	高校部 林 昭悦 (金沢女子高) 石浦 義彦 (金沢泉丘高)
	障学部 南 進 (県立養護)
	加賀地区 小学校部 穴田 孝子 (三谷小) 川筋登史己 (向本折小)
	市村 良二 (木場小)
	中学校部 阿戸壮一郎 (丸ノ内中)
	高校部 東野 洋子 (小松市立女子高) 北室 正枝 (金沢西高)
	障学部 川上千鶴子 (小松養護)
	能登地区 小学校部 西野 和代 (天神山小) 福田 教導 (金ヶ崎小)
	高校部 堀 喜代子 (飯田高) 大場 豊治 (七尾高)
事 務 局	事務局長 永江 芳教 (金沢商高)
	副事務局長 久田 英夫 (金沢中央高) 中川 晃成 (館野小)
	庶務部 中田 稚子 (森本中) 宮嶋 雅美 (明和養護)
	会計部 佃 さえ子 (千代野小) 八田 和幸 (鳴和中)
	研究部 金田 京子 (宇ノ氣小) 嵐 雪絵 (金大付属中)
	会報部 坂橋 法子 (河南小) 西尾恵美子 (中島小)
	大坂 育代 (湯野小)
	研修部 八田 和幸 (鳴和中) 北村 千恵 (山中小)
	調査部 大浦 努 (大浦小) 宮嶋 聡美 (松波小)
	西川 真理 (野々市小)

11.15 第4回全国大学書写書道教育学会・平成元年度全国大学書道学会
～17・平成元年度日本文学館全国書道教育部門会《後援》

12. 1 第1回理事会〔金沢商業高等学校〕
(第1回石川県書写書道教育研究大会を金沢市にて開催することを決定)

12.10 『石川県書写書道教育』(創刊号)発行

1990. 4.27 金沢地区理事会〔金沢商業高等学校〕
(平成2年) 第1回石川県書写書道教育研究大会要項立案
(第1回石川県書写書道教育研究大会会場校決定)

5.18 第2回理事会〔金沢商業高等学校〕
第1回石川県書写書道教育研究大会要項決定

6.29 第1回石川県大会第1回実行委員会〔小立庵〕
第1回石川県書写書道教育研究大会実行委員会設立

9.27 第1回石川県大会第2回実行委員会〔金沢商業高等学校〕

10. 1 『石川県書写書道教育』(第2号)発行

10.11 公開授業学習指導案検討委員会〔石川県教育委員会〕

10.25 研究協議会打ち合せ会(助言者・授業者・司会者・記録者)

11.10 大会当日係担当者打ち合せ

11.17 第1回石川県大会第3回実行委員会〔金沢泉丘高等学校〕

11.19 第1回石川県書写書道教育研究大会
〔金沢市立南小立野小学校／野田中学校・石川県立金沢泉丘高等学校〕
第3回理事会(第2回大会を野々市にて開催することを検討する)

1991. 1.27 第22回石川県書写書道教育懇談会〔ガーデンホテル金沢〕
(平成3年)

2.22 第4回理事会〔金沢商業高等学校〕
(第2回大会を野々市町にて開催することを決定)

3. 1 『石川県書写書道教育』(第3号)発行

5.17 第23回石川県書写書道教育懇談会〔KKR加賀〕

6. 4 第5回理事会〔金沢商業高等学校〕
第2回石川県書写書道教育研究大会要項決定
(第2回石川県書写書道教育研究大会会場校決定)

6.10 研究集録紙上発表原稿依頼

7. 9 石川県学校教育研究会国語部書写部門会研究授業

7.19 第2回石川県大会第1回実行委員会〔ガーデンホテル金沢〕

8.15 研究集録紙上発表原稿締切

大会集録編集開始
9. 6 事務局会議〔金沢中央高等学校〕

9.10 第1次案内発送

9.28 事務局会議〔金沢中央高等学校〕

10.17 第23回石川県書写書道教育懇談会〔ガーデンホテル金沢〕

10.20 第2次案内発送

10.23 石川県学校教育研究会国語部書写部門会
(西川真理・細川真弓先生の学習指導案が検討される。)

10. 公開授業学習指導案検討される(石川県教育委員会指導主事)

10.30 『石川県書写書道教育』(第4号)発行

11. 5 第2回石川県大会第2回実行委員会〔野々市町文化会館フォルテ〕
研究協議会打ち合せ・大会当日係担当者打ち合せ

11.16 大会最終準備

11.18 第2回石川県書写書道教育研究大会・第6回理事会

第1回石川県書写書道教育研究大会役員

顧問	金子曾政 南 和男
参 与	北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良 横西 清 吉田一郎
大会長	藤 則雄
副大会長	小西 優 河本隆成 松寺淳照 三宅正敏 山田泰正 法水光雄
実行委員長	法水光雄
副委員長	嘉門久直 森川登夫 谷村修次 中山武久
委 員	【部担当】 【総務部長】 林 昭悦 【編集部長】 干場和子 【記録部長】 南 進 【会計部長】 青山洋子
研究授業者	林 道子（南小立野小学校）古本佳世（野田中学校） 石浦義彦（金沢泉丘高校）
大会事務局	【事務局長】 永江芳教 【副事務局長】 久田英夫 中川晃成
○掛-7 s掛-7	【総務部】 ○中田稚子 s 八田和幸 宮嶋雅美 北村千恵 【編集部】 ○北野京子 s 嵐 雪絵 板橋法子 大坂育代 【記録部】 ○大浦 努 s 板橋法子 西尾恵美子 宮崎聡美 【会計部】 ○佃さえ子 s 西川真理

平成二年度

石川県書写書道教育連盟役員 ——敬称略——

名誉顧問 金子曾政<元金沢大学学長>

顧問 南 和男<石川県教育長>

相談役 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良 横西 清

参与 吉田一郎

会長 藤 則雄<金沢大学教育学部長>

副会長

{ 石川県教育委員会学校指導課長 } { 金沢市小学校教育研究会書写部会長 } { 金沢市中学校教育研究会習字部会長 } { 石川県高等学校教育研究会書道部会長 } { 石川県書写の会会長 } { 金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者 }	小西 優	<金沢市立馬場小学校教頭>
	河本隆成	<金沢市立森本中学校教頭>
	松寺淳照	<金沢市立七尾高等学校教頭>
	佐藤政俊	<鹿島町立越路小学校教頭>
	山田泰正	<金沢大学助教授>
	法水光雄	<金沢大学助教授>

理事長 [金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 兼 任

副理事長 :

幼・保部 :	嘉門久直 <森本幼稚園長>
小学校部 :	森川登夫 <津幡町立中条小学校長>
	谷村修次 <小松市立蓮代寺小学校長>
中学校部 :	
高校部 :	中山武久 <県立津幡高等学校教諭>

監事 木本峰生<七尾市立御祓中学校長>
山本椋子<小松市立粟津小学校教頭>

理事 :

小学校 : 中学校(国語科書写)担当指導主事	濱 和子 <七尾地方教育事務所>
高等学校(芸術科書道)担当指導主事	高沢幹夫 <高等学校教育係長>

*金沢地区

幼・保部 :	青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長>	
小学校部 :	林 道子<南小立野小学校教諭>	中川晃成<館野小学校教諭>
中学校部 :	干場和子<野田中学校教諭>	古本佳世<野田中学校教諭>
高校部 :	林 昭悦<金沢女子高校教諭>	石浦義彦<金沢泉丘高校教諭>
障害児学校部 :	南 進 <県立養護学校教頭>	

*加賀地区

小学校部 :	穴田孝子<三谷小学校長>	川筋登史己<向本折小学校教頭>
中学校部 :	阿戸壮一郎<丸ノ内中学校教頭>	
高校部 :	東野洋子<小松市立女子高校教諭>	北室正枝<金沢西高校講師>
障害児学校部 :	川上千鶴子<小松養護学校高等部主事>	

*能登地区

小学校部 :	西野和代<天神山小学校長>	福田教導<金ヶ崎小学校教頭>
中学校部 :	永井志津子<朝日中学校教頭>	
高校部 :	蛸喜代子<県立水産高校教諭>	大場豊治<七尾高校教諭>

事務局

事務局長 :	永江芳教<金沢商業高校教諭>	中川晃成<館野小学校教諭>
副事務局長 :	久田英夫<金沢中央高校教諭>	
庶務部長 :	中田稚子<森本中学校教諭>	副部長・宮崎雅美<明和養護学校教諭>
会計部長 :	佃さえ子<千代野小学校教諭>	副部長・西川真理<野々市小学校教諭>
研究部長 :	八田和幸<鳴和中学校教諭>	
研究部長 :	北野京子<宇ノ気小学校教諭>	副部長・嵐 雪絵<金大付属中学校講師>
会報部長 :	板橋法子<河南小学校教諭>	副部長・西尾恵美子<辰口中央小学校教諭>
会報部長 :	大坂育代<湯野小学校教諭>	
研修部長 :	八田和幸<鳴和中学校教諭>	副部長・北村千恵<湖北小学校教諭>
調査部長 :	大浦 努<千坂小学校教諭>	副部長・宮崎聡美<松波小学校教諭>

平成3年度 石川県書写書道教育連盟役員 一敬称略一

名誉顧問 金子曾政<元金沢大学学長>
顧問 肥田保久<石川県教育長>
相談役 北西正二 坂口敏 田島庄吉 久田久信 水田茂良 横西清
参与 吉田一郎

会長 藤 則雄<金沢大学教育学部長>

副会長

[石川県教育委員会学校指導課長]	小西 優
[石川県市立幼稚園協会理事長]	源 通<妙源寺幼稚園長>
[金沢市小学校教育研究会書写部長]	河本隆成<金沢市立馬場小学校長>
[金沢市中学校教育研究会習字部長]	松寺淳照<金沢市立森本中学校長>
[石川県高等学校教育研究会書道部会長]	三宅正敏<県立七尾高等学校長>
[石川県特殊教育諸学校校長会長]	畑山節夫<県立ろう学校長>
[石川書写の会会長]	森川登夫<津幡町立中条小学校長>
[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者]	法水光雄

理事長 中山武久<県立津幡高等学校教諭>
副理事長：幼・保部： ()
：小学校部： 吉田長憲<金沢市立湯涌小学校教頭> [市小教研書写副部長]
谷村修次<小松市立蓮代寺小学校長>
松本勝雄<中島町立瀬風小学校長>
：中学校部： 松本隆久<金沢市立北鳴中学校教頭> [市中教研習字副部長]
木本峰生<七尾市立御蔵中学校長>
：高校部： 林 昭悦<県立金沢女子高等学校教諭>
：盲・弱・養護学校部： 村本恒夫<県立明和養護学校教頭> [県特殊教育諸学校
教頭会理事長]

監事 山本穆子<小松市立栗津小学校教頭>
西野和代<七尾市立天神山小学校長>

理事：県教委学校指導課：

[小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] 山田寿一<七尾地方教育事務所>
[高等学校(芸術科書道)担当指導主事] 清水 実

*金沢地区

：幼・保部： 青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長>
：小学校部： 林 道子<南小立野小学校教諭> 中川晃成<館野小学校教諭>
：中学校部： 手場和子<野田中学校教諭> 古本佳世<野田中学校教諭>
：高校部： 石浦義彦<金沢泉丘高校教諭> 永江芳教<金沢商業高校教諭>
：盲・弱・養護学校部： 南 進<県立養護学校教頭>

*加賀地区

：小学校部： 川筋登史己<東陵小学校校長> 表 英治<東谷口小学校長>
：中学校部： 阿戸壯一郎<丸ノ内中学校教頭>
：高校部： 東野洋子<小松市立女子高校教諭> 北室正枝<金沢西高校講師>
：盲・弱・養護学校部： 川上千鶴子<小松養護学校高等部主事>

*能登地区

：小学校部： 福田教導<金ヶ崎小学校教頭> 濱 和子<相馬小学校教頭>
：中学校部： 永井志津子<朝日中学校教頭>
：高校部： 鱈喜代子<県立水産高校教諭> 大場豊治<富来高校教諭>

事務局

：事務局長： 久田英夫<金沢中央高校教諭>
：副事務局長： 中川晃成<館野小学校教諭>
：庶務部： 部長・中田稚子<森本中学校教諭> 副部長・宮嶋雅美<明和養護学校教諭>
松井瑞代<大聖寺高校講師>
：会計部： 部長・佃さえ子<千代野小学校教諭> 副部長・八田和幸<鳴和中学校教諭>
：研究部： 部長・北野京子<宇ノ気小学校教諭> 副部長・嵐 雪絵<金大付属中学校講師>
：会報部： 部長・板橋法子<安宅小学校教諭> 副部長・西尾恵美子<辰口中央小学校教諭>
部員・大坂育代<湯野小学校教諭> 老田さゆり<西南部中学校教諭>
：研修部： 部長・八田和幸<鳴和中学校教諭> 副部長・北村千恵<湖北小学校教諭>
：調査部： 部長・大浦 努<千坂小学校教諭> 副部長・宮崎聡美<宝立小学校教諭>
部員・西川真理<野々市小学校教諭>

第2回石川県書写書道教育研究大会役員

—敬称略—

顧問 金子曾政 肥田保久

参与 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良
横西 清 吉田一郎

大会長 藤 則雄

副大会長 小西 優 源 通 河本隆成 松寺淳照 三宅正敏
畑山節夫 森川登夫 法水光雄

実行委員長 中山武久

副実行委員長 吉田長憲 谷村修次 松本勝雄 松本隆久 木本峰生
林 昭悦 村本恒夫

実行委員【部担当】 【企画研修部】 石浦義彦 林 道子
【研究集録編集部】 干場和子 古本佳世
【記録部】 永江芳教
【会計部】 青山洋子

公開授業者 西川真理 細川真弓 (野々市小学校)
南 進 平杉吉次 (県立養護学校)

大会事務局 【事務局長】 久田英夫 【副事務局長】 中川晃成
○中-7 【総務部】 ○中田稚子 s 八田和幸 宮嶋雅美 北村千恵
s 中-7 松井瑞代
【編集部】 ○板橋法子 s 嵐 雪絵 北野京子 西尾恵美子
大坂育代
【記録部】 ○大浦 努 s 宮崎聡美 老田さゆり
【会計部】 ○佃さえ子 s 八田和幸

石川県書写書道教育連盟 規約

第 1 条 (名 称) 本会は、石川県書写書道教育連盟と称する。

第 2 条 (本部・事務局) 本会の本部を金沢大学教育学部内におき、事務局を事務局長の在勤校におく。

第 3 条 (目 的) 本会は、授業研究を中心として、県内の幼稚園(保育園・保育所) 小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校) 特殊教育諸学校等の一貫した書写書道教育と書道文化の更なる充実発展に努めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第 4 条 (事 業) 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

- (1) 研究会の開催
- (2) 会報の発行
- (3) 関連する学会・研究会・内外諸機関等との連絡と協力
- (4) 講演会・講習会の開催
- (5) 調査研究
- (6) その他必要な事業

第 5 条 (組 織) 本会は、県内の幼稚園(保育園・保育所) 小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校)・特殊教育諸学校の教員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する。

第 6 条 (役 員) 本会に、下記の役員をおく。

会 長 1 名 副会長 若干名 理事長 1 名
副理事長 若干名 監 事 若干名 理 事 若干名
事務局長 1 名 副事務局長 若干名

(1) 事務局には、次の六部を設け、各部とも、部長 1 名
副部長 1 名、部員 若干名をおくものとする。

・庶務部・会計部・研究部・会報部・研修部・調査部

(2) 本会に、名誉顧問・顧問・相談役・参与を推戴することができる。

(3) 役員を選出と任期は、下記のように定める。

(I) 役員は理事会において選出する。

(II) 役員の任期は一か年とする。ただし、再任は妨げない。

第 7 条 (理事会) 本会の理事会は、本会の運営及び事業に関する重要事項を審議決定する。

(I) 理事会は、必要に応じて、会長が召集する。

(II) 理事会は、第 6 条における、会長・副会長・理事長・副理事長・監事・理事・事務局長・副事務局長・事務局各部長によって構成する。

第 8 条 (会計) 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。

第 9 条 (会計年度) 本会の会計年度は、4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

第 10 条 (監査) 本会の会計は、監事によって監査を受ける。

[附 則]

第 11 条 規約の改訂は、理事会の議決を経なければならない。

平成 元年 8 月 29 日 制定

平成 2 年 5 月 18 日 一部改正